ファンタジー短編集

ティシー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ファンタジー短編集

【Ｎコード】
Ｎ１３７０Ｐ

【作者名】
ティシー

【あらすじ】
◇◇ファンタジー中心、時々その他。

前書きの所が各短編のあらすじとなります。
※続編の要望があれば言ってください＾＾

オジサマ王と勘違い少女（前書き）

半年前、地球からトリップした私。森での生活も慣れたものだった。
そんなある日、いつも通り朝食の調達を川でしていると、オジサマが現れた。
どこか風格漂うオジサマ・・・あなたは何者？

昔はイケメンだったであろうオジサマと、少し思考回路がずれてる少女の物語。

オジサマ王と勘違い少女

何でこうなった・・・？

川で釣りをしていたから？
森の住人と呼ばれるまでに、森に住み着いていたから？
いや、半年前地球からこの地へトリップしてしまったからか？

だってまさか、川で会ったオッサンが、

一国の、この国の王様だったとは・・・。

――――・・・

「ん～！今日もいい天気！

気分爽快！
体調万全！
テンション上々！
さあ、朝ご飯を調達だ！！」

釣り道具を持って川へ行くと、木の陰になる場所を選び早速釣りを始める。

木々の隙間から入る陽気が気持ちよくて、釣竿を持ったままウトウトしていた。

すると突然手応えを感じ、バッと目を開ける。・・・が、

「・・・・・・っっ！！？？・・・？！！」

視界に入ったのは旅装姿のオッサン。
声にならない声を上げると、距離を取り胸に手を当て呼吸を正す。
竿はオッサンの横に転がっている。

「ああ、悪いね。驚かせたかな？」
「お、驚いたなんてもんじゃないです。寿命が半年縮まりました！」
「それはそれは大変だ」

全然大変そうじゃない！

私は久々に人を見たものだから、過剰反応をしてしまっていた。

「オッ・・・あなたは！？」
「今オッサンって言おうとしたよね？まぁいいけど。
ボクは通りすがりの者です」

ウソじゃん。ここは完璧な森で、通りすがれる所なんてない。

「・・・」

疑いの目を向ける私に対してオッサン―よく見ると雰囲気がオジサマっぽい。若い頃は格好良かったのでは？―は笑顔を返してくる。

「森の妖精がいると聞いてね。是非ともこの目で確かめたかったんだ」

森の妖精？・・・この森に？
ニコニコと裏のない笑顔でしゃべられると、ついつい警戒が緩んでしまう。

「その妖精は見れたんですか？」
「ああ、見れたね」

今度私も探しに行こうかな。

「どんなんでした？」
「背が小さくて、長い黒髪に大きな黒目。外見は愛らしいけれど活発的」
「・・・・・・」
「君だね」
「・・・・・・はっ！？」

「本当に森の妖精なのかな？」

誰が？私が！？

「まさか！！」

「そう。なら何故この森に住んでいるの？」

「えぇ！？えっと・・・」

トリップしてきたからです！なんて絶対信じてもらえない！

「あぁごめんね。まだ無理に答えなくてもいいよ」

まだ・・・？

「ど、どうも・・・」

「君は顔に出るようだね」

クスクスとオジサマは笑う。

そんなに顔に出てる？

「あぁそうだ、名前を聞いてもいいかい？ボクはバル」

「・・・芽慧菜（めえな）」

「メーナ？いい響きだね。それじゃ森の妖精も見れたことだし今日は帰るよ。

またねメーナ」

そうして、颯爽とオジサマ―バルさん―は帰っていった。

私が森の妖精？っていうか、メーナじゃなくてメエナなんだけどなぁ。

しばらくバルさんが消えた方向を見ながら、そんなことを考えていた。

・・・・・・

それから一週間、バルは毎日姿を見せた。
私がどこにいても何故か見つけるのだ。
一週間も経つと私もすっかり警戒を解いていた。
それに久々に人と会話していることが嬉しくて、親友を作った気分だ。
地球から来た事もすでに話してある。

でも気になる事が一つ。

「バルは仕事してないの？」
「ん？しているよ」
「でも毎日来るじゃん」
「休暇を取っているのさ」
「じゃあそろそろ来れなくなる？」
「寂しいのかい？」
「そりゃあ・・・せっかく友達出来たのになぁって」
「友達ね。今はそれでいいけど・・・メーナ次第なんだけどね」
「何が？」
「こっちの話。メーナは何歳だい？」
「１７。バルは？」

「４３だよ」
「４３！？」
「ん？なんだい？」
「いやなんか・・・いえなんでも」
「まだまだ元気だよ？」
「何が？」
「何だろうね」
「バルってなんか不思議」
「そうかい？」
「うん」

食えないオジサマだ。

「バルの仕事って何？」
「ん～？何だろうね」
「ヒント！」
「うーん、王宮」
「王宮！？」

あ、分かった！

「掃除のオジサマか！！」

バルが掃除をしている姿を想像する。
にこにこしながら、皆に挨拶して・・・

「似合うよバル！！」
「・・・そうかい。ありがとう」
「あ、でも庭師とかのが合うかも？」
「・・・」

「いつから働いてるの？」
「・・・幼少期」
「じゃあ若い時モテたでしょう？」
「若い頃っていうか、今も結構モテると思うんだけど」
「いやん！バルったらプレイボーイ！！」
「そこでテンション上がるんだね」
「バルって若い時格好良さそうだもん」
「ふむ。どうだったかな。
メーナはどうなんだい？」
「私？普通じゃない？」
「セックスは何人としたことがあるんだい？」
「せっ！？いやんバル！いくらバルがプレイボーイだからって言葉はオブラートに包むもんだよ～！」
「いやテンション上がられても」
「バル奥さんは？」
「いないね」
「そうなの！？てっきり奥さんに内緒で愛人が何十人もいるのかと・・・」
「メーナはボクにどんな印象持ってるんだい・・・」

少し呆れ気味にバルは呟く。

「えっ、プレイボーイ？」
「メーナって少し思考回路がずれてるよね」
「そう？」
「そう」

首を傾げながら考えていると・・・

「バルケルト様！漸く見つけましたよ！！」

若い兵士っぽい人が息を切らしながら走って来た。
・・・バルケルト様？
「バルの事・・・？」
「バル！！？」

私の呟きに、近くまで来た兵士が反応した。
そうか、様を付けられているくらいだから結構上の格なのか。

「王宮お抱えの装飾師とか？」
「やっぱりメーナはずれてるよね」
「メーナ？ああ・・・！その、方が」
「ああ。準備は？」
「整っていますが、しかし本当に・・・」
「何も言うなよラロット」
「！はい・・・」
「装飾師って立場強いんだね・・・」
「はぁ・・・。まぁいいや、少し早いけど行くよメーナ」
「えっ？どこに？」
「王宮に」
「はっ！？私そんな技術ないよ！」
「何の技術だい。大丈夫、ボクは床の技術なら自信がある」
「何の話ですか！？・・・あ、失礼しました」

バルの一言にツッコむ若い兵士。

「さあ、行こうか」
「だからどこに！？」
「イイ所」

「待って！何か危険を感じる！
これでも半年森で生きて来たから！危機回避能力が警告を―」
「ゴチャゴチャ言ってないで行くよ」

ひぃぃ！な、なんかバルが今怖かった！！

「そろそろ着きます」
「ああ」

そして、ソレはやって来た。

「馬車？」
「そう。さあ乗って」

渋る私をバルが押し込むと、馬車は走り出した。

「あの・・・」
「なんだい？」
「なんていうか・・・王宮って大きいですね」
「そうだね。所で何で敬語？」
「今バルの装飾師としての腕に尊敬の念を抱いているからです」
「装飾師に決定したんだね。
さあ入って」
「お、お邪魔します・・・」

多くの兵士や侍女が頭を下げている。

「装飾師ってすごいんだ・・・」

「・・・」

はー、とかへー、とかおー、とかほーとか間抜けな声を連発しながら王宮の中を歩く。

「あの・・・」

「なんだい？」

「なんていうか・・・ここは？」

「玉座」

「それは、バルの座っている所でして、わた、私の座っている所は・・・」

「まぁ一般的に言う王妃の座る所だよね」

「で、ですよね」

アレ？なんか・・・人生最大の勘違いでもしてた？

「あの・・・」

「なんだい？」

「なんていうか・・・王様、だったりとか、しちゃいます？あはは・・・」

「そうだね」

っ！！！

サラっと、サララっと言ったよこの人ー！！

え？え？え？？

…はっ！！

「私今から処刑されるのっ！？」

「何故？」

「だって無礼を！」

「今更だね」

「そうですよね！？」

「父上、お話の途中失礼します」

「ああいいよ」

「その方が噂の方ですよね」

「そうだね」

「では」

そこで青年は私の前に跪く。…えぇ！？

「母上。お待ちしておりました」

「はいぃ！？」

「自由奔放な父ですが、よろしくお願いします」

「えっ？ちょ、ええ？！」

母上！？

「ば、バルル！」

「一つルが多いね。なんだい？」

「これっ、これはどういうことでしょうか！！？」

「ボクとメーナが結婚するってことだよね」

「はっ！？」

「いいよね？まぁ拒否権はないんだけどね」
「ええ！？」
「大丈夫、まだ手は出さないよ」
「あのぉっ！！？」

かくして、前途多難な私の王宮生活は始まった。

オジサマ王と勘違い少女（後書き）

ありがとうございました。

オジサマ王と婚約者の少女（前書き）

半年前、地球からトリップした私。
先日、森での生活から一転、突然国王であるバルの婚約者になり王宮生活を開始。
するとなんだがとってもとっても大切にされる私。…何故？！

昔はイケメンだったであろうオジサマと、少し思考回路がずれてる少女の物語。

オジサマ王と婚約者の少女

お久しぶりです。
通称‘森の妖精’こと、芽慧菜（メーナ）です。

すいません。自分で言うのは思ったより恥ずかしいものだと知りました。

「メーナ？さっきから何をブツブツ言っているんだい？」
「いえなにも」
「そう？」

ただ今、
先日婚約者になったらしいアクルム国王・バルケルトと庭を散歩中です。

「ねぇバル」
「なんだい？」
「本当に結婚するの？」
「もちろんだよ」

異世界へ来て半年、森の小川でバルと知り合って一週間。
‘電撃婚’ってやつですね？
あ、それと…

「バル歳いくつだったっけ？」
「４３だよ」
…２６歳差の、
‘歳の差婚’も追加です。
「奥さんいないのになんで子どもはいたの？」
「世継ぎは必要だからね。アッザフォースが今唯一の子だよ」
電撃婚＆歳の差婚、加えて子持ちの夫。
なかなか異世界とは‘ヘビー’です。
あ、王と一般ピープルの私だから‘格差婚’も追加？
それはそうと…
「キレイ」
「だろう？」
王宮の庭には花が咲き誇っていて、うれしそうだ。
するとバルは脇に立っている立派な木に触れる。
「前に言っていた妖精を連れてきたよ。
ああ。その通りだった」
驚いた。バルも会話できるの？
異世界トリップと言えばオプションが付き物でしょ？
身体能力が上がったり、魔法が使えたり。でも私は違った。
こちらの言葉をしゃべれるようになり、木とも会話が出来るよう

になっていた。
森で生きてこれたのはこの能力のおかげだろう。木と会話することで、常に危険を回避できた。
まぁ会話出来ると言っても触れなければ分からないんだけど。

「でもね、まだ落とせていないんだ。
あぁ、本人が承諾するまで結婚はしないよ。婚約のままだ。
ボクもそこまで鬼じゃないよ」

あの、木と何の会話をされていらっしゃるのですか。

「じゃあまた。
ああ、大丈夫。自信はあるよ。くくっ」

あの…？

「悪いね。驚いたかい？」
「少し。バルもしゃべれるんだね」
「おや、メーナもかい？
なるほど、それで彼らは森の妖精と呼んだのか」
「木が？」
「ああ。ボクはメーナの存在を木の情報で知ったのさ。
木々の情報網は広い。メーナも分かるだろう？」
「うん。おかげで森を生きれたもん」
「なるほどね」

それからゆっくり庭を歩いていたが、
探しに来た兵士から戻るように説得され、仕方なくといった感じでバルは戻っていった。

変わりに残った熟年の侍女は、私に期待に満ちた眼差しを向ける。

「素晴らしいですわメーナ様」
「な、なにがですか？」
「あそこまで王を虜になさるとはっ」
「はい？」
「これからもよろしくお願いしますね」
「え、あ、はい？」

それからというもの、色々な人がバルの良さを売りに来た。の、だが…

証言者1・噂話が大好きな侍女
「是非ともご結婚なさるべきです！バルケルト王はそれはもう巧いと評判です！あぁ違いました。
優しいですし、追われた時の足の速さと言ったら驚きです。かくれんぼもお上手ですね―・・・」

良い所はどこですか？

証言者2・勤めて長い侍女
「お願いですから離れることはなさらないでください。漸く、真面目に働いていただけるようになったのです。
王は全てにおいて能力がお有りになるのに、暗闇でしか発揮なさらないのです。間違えました、明るくても偶に発揮されます。
多少表と裏はある方ですが、とても尊敬できる方です。どうかよろしくお願いします」

褒めているのか、貶しているのか？
いや本人的には貶してはないんだろう。顔が必死だもの。

証言者3・王子の母
「バルケルトねぇ。いいわよ、夜は。働き者で一国の王に相応しいと思うわ。
でもロリ…失礼、老若男女問わず優しいと聞くし。あぁ男は入れちゃダメね。
でもね、我が子ながらアーザーは男前でまだ18だしイイと思うわ。検討しておいたら？」

何をですか。
もっとグチグチ言われるのかと思ったら随分サッパリした方でした。

証言者4・アーザー（アッザフォース第一王子）
「俺は父上を尊敬していますよ。同じ男として。見習いたいですね。
仕事もやればできる方ですし、悪いとは思いませんよ。
まだ俺が王位を継ぐのは早い気がしますし、もう少しがんばってもらいたいですね」

・・・他にもたくさんの方から、バルの良い所？を語られました。
皆さん褒める所が一つは同じで素晴らしいんですが…そんなにタラシなんですか？

もう一つ気になることが。
王宮生活を始めて一週間。なんだが必要以上に皆さんに大切にされている気が…。

あれはお昼に暖かい日差しを受けながら庭のベンチに座って、
熟年の侍女ローテの熱いニコニコ視線を受けながらも、ウトウトしていた時のこと。

「ん～、いい気持ち。眠いなぁ」
「あらあら！
ちょっとそこのあなた！新しいベッドを持って来て。すぐによ！」

眠気は一気に吹っ飛んだ。

「えっ！？ちょ、ちょっと待ってください！落ち着いて！
部屋で寝ますから！大丈夫ですから！」
「いえでも王妃様が…いえいえまだですわね焦っちゃダメよローテそうよまだ時間はあるわ。
…メーナ様のご希望は全て叶える様にと仰せつかっています故」
「で、でもですね！…あ！じゃあ部屋で寝たいです！」
「では戻りましょう」
「…ほっ」

他にも…

「ん～！これ美味しい！！」
「そうでございますか！
ちょっとそこのあなた！追加でこの料理を持って来て。すぐによ！」

えええ！？

「ストップストップ！これだけで十分ですから！！
残すともったいないですし！」
「いえでも王妃様…間違えましたメーナ様が望むものは全て与えるようにと仰せつかっています故」
「まだ望んでませんからー！」

等々、ありがたいのだが行き過ぎていて困っている今日この頃。
だから一番聞きやすそうなアッザフォース王子に会った時に聞いてみた。

「あの…なんだか皆さんから大事に大事に扱われてるような気がするんですが」
「それはそうでしょうね。この頃父がよく仕事をしてくれていますから」
「バルが関係あるんですか？」
「はい。父は貴女が来る前は仕事を放ってどこかへ行ってしまうことが多かったんです。
でもメーナ様が来て、ずっと城にいるようになりました。だから、皆貴女をここに留めたいんです」
「なるほど…」
「でもそれだけじゃないですよ。皆貴女を本当に気に入っています。可愛くて仕方ないんでしょうね」
「はい？」
「俺もその一人です」
「ええ！？」
「父はメーナ様しか選ばないでしょうが、メーナ様は自由です。
俺のが若さもあるし、歳も近い。テクニックもその内追い抜く自信があります。

どうです？俺を是非愛人に」
「えええ！？？」

国王と王子を好き放題（何か違う！？）ですか？！
なんて贅沢なんだ！！

「アーザー。困るね、ボクの居ない所で姫を口説かれちゃ」

そこへ眉を寄せたバルが登場する。

「では今ならいいのですね？」

れ・い・せ・ん。
空気は冷たいのに、二人の間には火花が見える。

こ、これは俗に言う…

「‘ぎゃくはー’ってやつですね！」
「・・・」
「・・・」

乙女が一度は夢見る（？）アレですね！

「アーザー、君はあのじゃじゃ馬の面倒を見きれるのかい？」
「ですから俺は夜だけで結構です。
愛人で良いと言っているじゃないですか」
「おいしいところだけ取ろうと言うのだね」
「そうですね」

「…誰に似たんだろうね」
「夜関係については父上ですかね」
「そうだね。顔も感謝してほしいんだけどね」
「そうですね、感謝してます」

「あ、あのバル？」
「なんだい？」
「この格好は、なんなのでしょうか？」

そう、今居る場所はバルの膝の上。前には今日も美味しそうな料理。
この格好でなければ存分に楽しめただろう。

「うん？食べやすいかと思って」
「いや全然！全然食べにくいよ！？」
「ほらメーナ。口開けて？」
「ムリムリムリマリ！違うっ！
難易度高い！イッツ高度技！ハイレベル！」
「ハイテンションだね」
「違うっ！」

話が通じないよこの人！

「何故に突然こんなことを！？」

昼までは普通だったはず！

「アーザーがね、メーナを取ろうとするから妬いちゃってね？だから」

いやいやいや意味が分からないよ！

「王子は私をからかっただけじゃ！？」

「ボクの前であれだけ宣言していたのに？」

「そ、そうだっけ？」

「あぁメーナは違う世界に旅立っていたのだったかな」

「か、かもです」

「まぁ今はアーザーのことはいいよ。ボクに集中して？」

言われなくてもこれだけ密着してると集中しちゃいます！

とりあえず腰に回している手をどけてください！さりげに撫でないでください！！

「あのバ、バルさん。心臓がもたないんですが」

「何故だい？」

「き、緊張して？」

「それはいいことだね」

どこがですか！？

「メーナ？」

「ははは い？」

「噛み過ぎだね。ドキドキしてる？」
「もの、ものすごく！！」
「そう。素直でいいね。
メーナはボクが好き？」
「えええ！？」
「ねぇ？」
「あのっ、ええっと、その、あっバル…バルは！？」
「好きだよ」
「っ！！」
「赤いね」
「～～っ」
「食べようか」

コクっと頷くと口の前に料理が運ばれてくる。

「あの？」
「口開けて？」
「いやほらっ、自分で食べれるっていうか、あの本当にっ！！」

心臓がもたないから！！

「くくっ、仕方ないね。こぼさないようにね？」
「大丈夫です！」

やった！
とりあえず箸は取り返した！

「ついでに降ろしてくれたり「しないよ」…ですよね」

ドキドキの食事をなんとか終えたのだが…

「バルさん？そろそろ降ろしていただきたいのですが？」
「ん～？もう少しゆっくりしていこうか。慣れたでしょ？」
「でも私重いし！」
「大丈夫さ。

それよりメーナ」

バルの纏う雰囲気と声色が変わる。
ついでに私の座る向きも横に変えられ、顔を覗き込まれる。

「ボクはメーナが好きなんだけど、メーナはボクが嫌い？」
「嫌いじゃないよ！？」
「そう。じゃあ好き？」

好き？

「どうなんでしょう！？」
「どうなんだろうね。
人を好きになったことは？」
「数回ほどっ」
「妬けるね」
「そうですかね！？」
「そうだね」
「でもバルだってあるでしょう？」
「あるね」

…あれ？胸がモヤっと…。

「メーナ？どうしたの急に」
「な、なんでもっ」
「隠し事はしないでほしいな」
「ホントに「あぁ、妬いた？」……かもしれません」
「素直で可愛いねメーナは」
「そ、そうですかね！？」
「そうだね。
メーナ。キスしようか」
「えええぇ！！？
……～っ！！ムリっっ！！！」
「わかったわかった。今日はしないから落ち着いて」
「落ち着きます！」
「うんそうだね」

「父上、ゾッコンですね」
「そうだろう？可愛くてしょうがないよ」
「王子！」
「メーナ様、王子ではなくアーザーとお呼びください」
「いいんですか？」
「もちろんです。さあ呼んでみてください」

王子…アーザーの柔らかい微笑みにつられて言葉を発す。

「あ、アーザー」

瞬間、バルの眉間にしわが寄った。

「メーナ。あれは放っておいてボクと話そう」
「え、でも」

「アーザー、分かるな？」
「ふふ、分かっていますとも」

そう言うとアーザーは去っていった。

「あ、あの何か怒ってます？」
「メーナには怒っていないよ」
「そ、そうですか」
「キスしなかったボクを褒めて欲しいねぇ」
「え？」
「なんでも？」
「そう？」
「そう」

「…んー」
「うん？どうしたのメーナ」
「眠い、かも」
「じゃあ部屋へ行こうか」
「ん」

な・ぜ？

「バルさん。私の部屋はココじゃないです」
「でもボクの部屋はココだよ」
「そ、そうですね。では失礼します！」

と言って部屋を出ようとするが、あっさり捕まり連行される。
「大丈夫、何もしないよ。
さあ寝よう」
「もう眠くないです！ということで部屋に戻ります」
「眠くないならお話しようか。ベッドの上で」
「…」
ニコニコなバルとドキドキな私。
「メーナ。大丈夫、おいで」
その甘い誘惑に体が動く。
「そういい子。さ、寝ようか」
バルの元まで行くとバルがベッドに入り、隣に来るよう私を促す。
一度躊躇した後に隣へ入る。
すると腰を引かれて耳元で一言。
「メーナ、好きだよ」
寝れないからやめてぇぇ！
「バ、バルってサラっと言うよね」
「そう？」

「うん、私は無理っ」
「いいよ今は」
今は？
「いつか言わせるけどね」
そう魅惑的に微笑むバルからは一生逃げられそうにありません。

オジサマ王と幼な妻（前書き）

一ヶ月前、遂に少女はアクルム王国の王妃となった。
王宮の人々は暖かく見守り、第一王子アーザーは若干疲れながらも近くで見守る。

４３歳のオジサマ王バルと１７歳の幼な妻メーナのノロケ話。

オジサマ王と幼な妻

――――その日、アクルム国王バルケルトと第一王子アッザフォースはそれぞれ書類に目を走らせていた。と、言っても一方は上の空であった…。

「ねぇアーザー」
「なんでしょう」
「ボクこの頃悩みがあるんだけど」

珍しい。この父に悩みとは。
隣国議会でも見たことがないくらい真剣な顔をしていたので、書類を書く手を止めて父に向き直る。

「俺が手伝えることなら協力しますが」
「本当かい？助かるよ」
「それで？」

「ああ…実はね、メーナとまだシていないんだ」

…。

「は？」
「キスは慣れてくれたみたいなんだけど…。

もう結婚して一ヶ月経つし、そろそろねぇ」

この人は何を言っているのだろうか。一国の王が、４３にもなったオッサンが何を情けないことを漏らしているのか。

「あなたって責めて責めて責めるタイプじゃなかったですか？」
「そうだね。でもメーナはダメなんだよねー」
「ヘタレですか」
「失礼だねぇ。そりゃ鳴き叫ぶメーナも見たいけどハジメテでソレはダメでしょ？」
「いやいやなんでそんな極端な考えにいくんですか」

普通に抱けよ。優しく。

「困ったねぇ…」

俺がな！

「メーナ様は嫌がっているんですか？」
「メーナじゃなくて母上だよアーザー」
「いいじゃないですか今更。もう奪う気も失せて、今は隣国のトゥイル王女がターゲットですし」
「トゥイル王女？あそこは王女と言っても確か歳が…」
「えぇ、俺より上です。２６でしたっけ？まぁあなた達には敵いませんよ。で？俺はともかくメーナ様はどうなんです？」
「単に恥ずかしいんだろうねぇ」
「なら問題ないでしょう」
「ボクもそう思うんだけどね」

王妃にする！と何が何でも押し切っていたあの時の覇気はどうし

た。

「メーナ様はあなたのことが好きなんでしょう？」

「そうなんだよアーザー！聞いてくれるかい」

なんだこの人。急に目が輝いたよ。

俺が肯定もしないまま話は進む。

「この前ね、初めてスキと言ってくれたんだ。キスで止めたボクってすごいよね。ディープだけど」

確かに。今までのこの人の言動を考えるとすごい、のか？

「でね、その時のメーナが可愛くてさあ……」

…その後延々と惚気話を聞かされる第一王子アッザフォース。

「（仕事をさせてくれ！そしてアンタも仕事しろよ！！）」

心の中の叫びは、決してバルケルトに届かない。

―――――――――

一ヶ月前、‘歳の差婚’‘電撃婚’‘格差婚’の３つを揃えて、アクルム国王バルケルトと結婚し、私はメーナ・アクルムとなりました。

「メーナってさ初々しいよね」
「うっ」
「好きって言ってくれたことも片手で数えれる程しかないし」
「ううっ」
「１７年間言ったことなかった？」
「あ、あったよ！…メールで、だけど」
「じゃあ直接言うのはボクが初めてだったの？」
「うん…」
「もしかしてキスも初めて？」
「ち、違うよっ！
ファーストキスは斉藤君だし、次がいっくんでその次がけーちゃんで次がバルだよ！！」
「…メーナ？それはボクを妬かせようとしているの？」
「は！？」
「それならボクも妬かせたいなあ。ボクは確かアギルネ…違うや、リリーシュ？いやカリミー？
あれ？それは初セックス？じゃあえーっとシェス？ううんフィニ

ン？それとも――」

その二人のやりとりを上から聞いていた第一王子アッザフォース。

「あの人達は昼間から庭で何という会話をしているんだ。

侍女や兵士も周りにいるというのに大声で…」

「もういいっ。バルなんて大ッ嫌い！！」

「えっ。ちょっとメーナ！」

「私はっ…私はバルだからこんなに緊張するのに！今までとは何か違って…特別だから！それなのにっっ…っバルなんか嫌い！！」

「メーナ……最初からそう言ってくれればいいのに」

「だってバルが！」

「メーナ、今日は初夜だね」

「はい！？」

父のニヤけた顔が目に入る。

「なんだ、結局また惚気か…」

疲れが増したアッザフォースだった。

―――――――――

チュンチュン…ピピ…

「ん…ん？」

……はっ！

「ヤっちゃった！？」
「残念ながらヤっちゃってないねぇ。ある意味ヤっちゃったけど」
「バル！？起きて…！」
「おはようメーナ」
「お、おはよバル」

「昨日こそはと思ってたんだけどね？
まさか先に寝てるとはねぇ」
「あぁぁ！ご、ごめんなさい！」

そうだ！お風呂から上がった後、ベッドが心地よ過ぎて！

「ボクは今からでもいいんだよ？」

声を低くしてそう言うと、バルは私を抱き寄せる。

「私はご遠慮したいです！」
「まぁ盛りたい年頃でもないからいいけどね。
だけどメーナに嫌われてるんじゃないかと不安になるんだ」
「そ、そんなことないよ！」
「そう？じゃあ言ってみて？」
「えぇ！？」
「好きって、ほら」
「い、今ですか？！」
「うん」
「……っ！～っ！！」
「無言の戦いをしないでくれるかい…。結構傷付くんだけどなぁ（ウソだけど）」
「わあぁ！ごめんバル！」
「昨日のお昼の勢いはどこに行ったの？」
「あれはっ！バルが…！！」
「ボクが何？」
「だって…、だってイヤだったんだもん！」
「何がイヤだったの？」
「バルが、他の女の人とキス、とかあの、セックスとか…」
「妬いたんだ？」
「うん…。ごめんなさい…」
「なんで謝るの？」
「その…鬱陶しいかなって…」
「メーナは可愛いね」
「いやいや今の話でどこが可愛いの」
「うん？ボクが好きで好きでしょうがないんだよね」
「そ、れは……。
…バルは？」
「ん？」

「バルは…？」
「何？言って欲しいの？」
極上の笑みを返されて赤くなった顔を隠すように、コクンと頷く。
「そうだね…一生離したくないくらい…ううん、片時も離れたくないくらい好きだな。
眠っている時間すらも惜しい。メーナはボクだけ見てればいいんだ…。
メーナも、ボクの気持ちの半分でいいから同じだと嬉しいんだけどね」
「……だよ」
「ん？聞こえないねぇ」
「好きっ！バルが好き！私だって好きな気持ちはバルに負けてないよ！！」
眠る時間は欲しいけど！！！
「ふふ、やっと言ってくれたねメーナ。
さあ、始めようか」
ニッコニコ笑顔のバル。
「え？」
「あれだけ連呼されればボクもそういう気になるよ」
「え、だってバルが…」

「大丈夫、自他共に認めてる――ボクは巧い」
「いやあの…」

「メーナ、天国を見せてあげる」

誘うように射抜いてくる瞳。

「今日は一日、ボクと天国観光にイこう――」

その瞳につられて、頷いてしまったのは不可抗力だ。

皇帝陛下は超ヘタレ（前書き）

突然異世界召喚させられ、最強の力を得た俺は…へ、ヘタレになった！

…冷笑の皇帝？バカ言うな！緊張し過ぎて限界が来ると顔の筋肉が引き攣るだけだ！

…最強の君主？側近のラミュが裏で全部仕切ってるだけだ！

…整い過ぎた顔に甘い声？それは昔からよく言われる！！

周囲から猛烈な勘違いを受け、ただのヘタレは何故か最強の皇帝となる。

皇帝陛下は超ヘタレ

――――強大な力を誇る大帝国・バージリーニ帝国。そして突如君臨した最強にして冷笑の皇帝・レイド。見た目は少女、中身は腹黒魔女・ラミュクリーゼ。二人がタッグを組んだ時、ヘタレは最強となる――――

「レイド陛下。本日は三国協議がございます」
「分かった」

皆が息を呑む美しさ。漆黒の髪と切れ目の瞳、低く響く声に、整い過ぎて冷たさすら感じさせる容姿は、神が与えたものだろうと専ら噂になっている。
噂はそれだけではない。
長い歴史を誇るバージリーニ帝国で、伝説の英雄とされるレドレルーヌの生まれ変わりであるという説や、一人で国一つを滅ぼしたなど様々だ。
臣下は絶対の信頼を寄せてついていく。まさに理想の皇帝。

―・―・―・―

「――とわが国は思う。…レイド殿、それでよろしいかな？」
「異存はない」
「レイド殿、一度わが国へ参らんか？素晴らしいダイヤが出てきて…」
「そういったことは側近に任している。話はラミュクリーゼとしてくれ」
「そ、そうだな。失礼した」

三国の王であるレイド、ジェネバ、ガーセは月に一度行われる三国協議を行っていたが、ジェネバもガーセも、三人の中で一番若いはずのレイドの機嫌を伺っていた。

「そろそろ終わりでいいか？」

それまで無表情だったレイドが微笑する。いや、ジェネバとガーセには絶対零度の笑みに見えたのだろう。二人は慌てて席を立つ。

「ではまた」

颯爽と臣下を引き連れて過ぎ去る後ろ姿は、圧倒的な風格に溢れており、逆らう事を許さない雰囲気を醸し出していた。

―・―・―・―

「あ〝〜！緊張した！！死ぬかと思った！腹っ、腹緩い！どうしよラミュ！」
「うるさい澪斗（れいど）。トイレへ行けばいいだろう」
「そうだなっ、そうする！」

日常的となった澪斗との騒がしい会話。いや、澪斗が勝手に騒いでいるだけだが。

ラミュクリーゼしか知らない皇帝の秘密。それは、澪斗が異世界人で、超ヘタレということだ。

――――時遡ること半年前。突然前皇帝が姿を消し、臣下達は混乱に陥った。そんな中、上級の召喚術と能力を開花させる力を持つラミュクリーゼはある一室で異世界からの召喚を試みた。

「【我は容姿と力を備えた英雄の召喚を望む】」

異世界からの召喚なんて、長い時を生きているラミュクリーゼも初めてで、面白半分でやったことだったが、現れた者は２０代前半の容姿端麗な男。
開かれた瞳と視線が合わさった時、ラミュクリーゼは一瞬魅入ってしまった。そして我に返ると気を取り直して膝をつく。
「お待ちしておりました、選ばれし新たな皇帝よ。我が名はラミュクリーゼ。貴方様の右腕となる者でございます」

とりあえず、数秒待つ。しかし何の返答もない。失礼かと思ったが頭を上げてみる。…後悔した。冷たく光る瞳が、自分を見下ろしていた。
だがここで引き下がるわけにもいかない。もう召喚は完了してしまったのだ。
「失礼かと思いますが、お名前をお聞きしてもよろしいでしょうか」
次期皇帝と目を合わせながら、内心の動揺を微塵にも出さず堂々と言い放つ。すると、少し経った後。
「…澪斗」
低く、しかしどこか甘く響く声が聞こえた。ラミュクリーゼは歓喜に震えた。この者に仕えれることを、この者の力を今から引き出せることを。
「澪斗様。貴方様は神に選ばれしお方でございます。その貴方様の偉大なる力を、私が開放させていただいてもよろしいでしょうか？」
「……あぁ」
「では失礼します」
そう言うと、澪斗の額に触れる。少し揺れた澪斗の体だったが、それから微動だにしなかった。そのことにラミュクリーゼは感心した。
ラミュクリーゼが額に触れたまま何かを呟く。すると澪斗の体から力が迸る。
「なっ、なんだ！？」

皇帝に相応しい容姿、圧倒的な力、風格、ここまでは完璧だった。
ここまでは。

「澪斗様の魔術を開放させていただきました。イメージしていただければ魔法を放てます」
「はい？魔法？……うおっ！なんか使えたぁ！！何！？何コレ！！恐っ！俺、俺どうしちゃったのォ！？」

ここからが、ラミュクリーゼの苦難の始まりだった。
なんだかいきなり豹変したように思える次期皇帝。

「落ち着いてください。貴方様の力は強大故――」

しかしその後は続かなかった。
窓から澪斗が巨大な魔法を放ったのである。それもガーセが統べる国の城に向かって。

――――ドゴオオオオンン…

「…」
「…」
「…」
「…ど、どうしよう。…え、ちょっ、え？え？え！？どうちよ…どうしようー！？」
「…あー、大丈夫です。落ち着いてください。たかが旗が折れただけです」
「たかが！？え、でもこれ、あれじゃない？開戦とか…」
「いえ、丁度良いです。このごろあの国は調子に乗ってましたし、後処理は任せてください」
「俺…俺処刑とかなんない？！！やばくない！？」

「やばくないです。大丈夫です」
「本当に！！？」
「本当です」

ラミュクレーゼは密かに頭を抑えた。
確かに無理矢理能力を目覚めさせると性格が変わることはある。何故なら奥底に眠っている力を引き出す過程で、余計なものまで引っ張ってくることがあるからだ。
しかしまさかだ、まさかこのクールな容姿で、ヘタレも目覚めるとは…ラミュクリーゼも予想していなかった。

「とりあえず、澪斗様には本日より新皇帝となっていただきます」
「え、ムリムリムリムリ」
「もう決まった事ですので、さあこちらへ」
「ムリムリムリムリ。俺難しいこと分かんない」
「大丈夫です。貴方様の無表情の顔でそれらしきことを言っておけば大抵騙されます」
「何！？何を騙すの！？？」
「私以外の全員を。皇帝がヘタ…失礼、不慣れな態度ですと臣下にも影響を与えますので、貴方様は凛とした表情を保ってください。よろしいですか？」
「ぜ、善処しまっス！」

ラミュクリーゼは決意した。自分が裏の帝王となろう、と。このヘタレには任せれない。

「ではこれから臣下どもが入ってきますので、澪斗様は堂々とご自分の名と、新たな皇帝であることを告げてください」

「ムリムリムリ！！なんて！？なんて言えばいいっ！！？あ～トイレ！腹イテェ！！」
「…では『我が新皇帝・澪斗である。逆らいし者には死を下す』こんな感じで」
「えええぇぇ！！？」
「良いですね？失敗は許されませんよ」
「も、もし失敗したら？」
「追い出されることになるでしょうね」
「えええええ！！」
「さあそろそろですよ。あとこの部屋以外で叫ばないでくださいね。この部屋は防音ですからいいですけど」

内心ラミュクリーゼはとても不安だった。だが…

「俺が新皇帝・澪斗だ」

無表情のまま、全てを平伏させるような声色で澪斗が言い放つ。

「逆らいし者には――」

そこまで言うと澪斗が微笑む。その表情に、ラミュクリーゼを含む臣下全員が見惚れ、同時に背中に走る冷やりとした感覚を感じた。

―・―・―・―

「澪斗様、素晴らしかったです。反対なんて一人も出ませんでしたよ。あの続きを言わなかったのも正解でしたね」
「…」
「澪斗様？」
「ラミュ、だっけ…」
「はい。ラミュクリーゼでございます。お好きなようにお呼びください」
「ラミュ。ヤバイ。出そう」
「はい？」
「ト、トイレェェ！！！」
「…」

――――数分後

「いやぁ～スッキリしたあ～！」
「はあぁ…幻想？さっきのは幻想なの？」
「あ、そういやさっきはごめんな！最後まで言わなくて！」
「いえ、先程申しましたように、あそこで止めて良かったかと思います」
「そう？良かったぁ～！！いやもうただでさえ緊張で筋肉動かないのに言葉発したら限界来ちゃってああなっちゃった」

ああなった、とは冷笑のことであろうか？…ということは、無表情も冷笑も言葉を切ったのも、全て緊張の所為？
言わなかったのではなく、言えなかった？無表情を作ってたのではなくて、笑顔を作れなかった？で、限界が来た結果、冷笑…？

わ、笑えねえ！！大丈夫か！？これで？！この先やっていけるか！！？

いやでも、裏で上手く操作すれば…。そうだ、私がしっかりしていれば問題ない。本人は緊張すると自動無表情機になるみたいだし。

幸いこの顔で、威圧感は本人がピンチになると出るみたいだし、基本無口で、冷笑は終わりの合図という暗黙の了解を作れば…美形で、冷酷な皇帝の出来上がり！…いける！ハズ。

―・―・―・―

それから半年。ラミュクリーゼが願ったとおりの理想の皇帝像が噂で広まり、他国は澪斗の力を相当重く見たらしくこっちの意のままであった。

「なあなあラミュ～！」

「何？」

「あの三国なんちゃら無くせなーい？」

「ムリ」

「即答ォ！？」

「当たり前だ。いいじゃん別に。座って相槌打ってるだけじゃん」

「違ぇ！あの二人の威圧感すごいんだぞ！？」

「澪斗の方が威圧感すごいと思うけど…」

「え？なんか言った？」

「いや？単にヘタレだなって思っただけ」

「ラミュって酷いよなぁ！？見た目天使っぽいくせに中身悪魔だろ！」

「澪斗のが酷いよ？理想を裏切るという意味で。失望感半端ないからね、そのヘタレ。ホントに人は見かけによらないよね」
「うっせ。好きでヘタレなわけじゃねェ」

ヘタレは認めるのか。

澪斗がこの世界へ来て三日目から私は澪斗と二人の時は敬語を使わなくなった。澪斗もそれを望んだし、私も面倒臭かったし。
こんな頼りない皇帝はどこを探してもコイツしかいないだろう。

「あ、澪斗。見合いの話来てたよ」
「はあ！？」
「まぁ当たり前だよね。むしろ遅いくらい。どうする？」
「いやいやどうするもこうするも俺ヤだよ」
「多分これからドンドン来るよ」
「マジで？」
「マジで。どうする？適当に王妃作っちゃう？」
「何その適当。俺の正体バレていいの？」
「ううんダメ。誰か一人にでもバレたら生涯終わると思った方がいいよ」
「俺おまえに会った時点で人生終わってるんじゃ――」
「なにか？」
「いえなにも」
「あ、私と結婚する？」
「は？」
「うん、この方法もアリだね」
「全然アリじゃねェよ。妻に尻敷かれるのは流石に避けたいんだけど」
「誰と結婚してもそのヘタレじゃ未来は見えてるんじゃ…？」
「…」

新たな皇帝が君臨してから早半年。
致命的な秘密を持つ皇帝レイドはそれでも日々を一生懸命に生きている。

「そう…ヘタレな皇帝とは俺のことだ！！」

「自慢気に言ってんじゃねェーよ」

皇帝陛下は超ヘタレ（後書き）

今度澪斗視点を書くような書かないような。あ、澪斗の「斗」が「ど」ってムリじゃね！？とか寛大なお心でスルーをお願いしますw

皇帝陛下は超ヘタレ（2）（前書き）

澪斗視点。

皇帝陛下は超ヘタレ（2）

大学の授業が終わると、音楽を聴くためにイヤホンを装着する。音量は周りの音が一切聞こえない程に。…よしっ、気合入れて帰ろう。

…ここからは戦場だぞ澪斗（れいど）。気を抜くな。女子を視界に入れるな。もし入れてもイチゴと思え。もしくは男子でも可。怖くない。怖くないよ～。

「お～い澪斗～」
「…怖くない怖くない…」
「お～い」
「大丈夫…」
「澪斗くーん」
「全員イチゴ…」
「おい顔だけ男」
「よーしっ行こう！」
「待ちやがれヘタレぇ！！」

いきなり後ろから頭を叩かれる。

「ってえ！あ、京（きょう）！なんだよ痛いだろ！」
「さっきから呼んでんだよ！気付け！」

「えっ？なんて？」
「だから、さっきから呼ｎ「なんてぇ！！？」
「イヤホン取れよ！！！」

京がなにか言って俺のイヤホンを引っこ抜く。

「おい何すんだよ！俺の命綱ぁ！！」
「何が命綱だヘタレめ！おまえのその無駄にクールな顔は飾りか！」
「他になんだってんだよ！？」
「威張ってんじゃねぇ！！ってバカな言い合いはこれまでにして、おまえ明日からどうすんだ？」
「明日？」
「夏休みだろうが」
「ああ！」
「で？どうすんだ？」
「ん～…別に決めてないなぁ。京は？」
「俺？…世界旅行でもしようかな…」
「ふーん」
「…もうちょっと反応ないわけ？」
「いや京ならしそうだなと思って」
「あっそ…もういい」

未だ大学内に留まっている俺達。これだけ騒げるのは周りに人が居ないからだ。

「…ん？澪斗おまえ…」
「何？」
「おまえ…透けてるぞ」
「えぇ！？そりゃ暑いけど水浴びなんて今日してねーよ！？」
「違げーよ！全体的にだよ！！」

「はあ！？？…うおおぉぉーー！！」
「何おまえ、何処行くの？」
「俺が聞きててー！！腹痛くなってきたあ！」
「あぁ！なんだ澪斗も世界旅行行きたかったのか。いや世界どころか宇宙旅行？まぁ元気でな」
「違うだろおおぉ！！？俺は行きたくねーーーー！！！！！――――……」

――――・・・

目の前に広がった光景に、腹が猛烈に痛くなる。一瞬目が合った目の前の人物はパッと頭を下げると言い放つ。
「お待ちしておりました、選ばれし新たな皇帝よ。我が名はラミュクリーゼ。貴方様の右腕となる者でございます」
一瞬だが確認できたそのツラは天使のような愛らしい顔だった。だが俺の元来持っているヘタレ属性がそんな天使にすらも反応し、顔の筋肉が動かなくなる。って、え？いやいや…え？
こ、ここっ皇帝…？！
俺が最上級に戸惑っていると、女が顔を上げる。思わず女を凝視した。
「失礼かと思いますが、お名前をお聞きしてもよろしいでしょうか」

聞こえた言葉に、なんとか言葉を返す。

「…澪斗」

すると女が微笑んだ。

「澪斗様。貴方様は神に選ばれしお方でございます。その貴方様の偉大なる力を、私が開放させていただいてもよろしいでしょうか？」

か、神ィ！？何言ってんだコイツは！？？

よく分からなかったが適当に言葉を返す。

「……あぁ」

「では失礼します」

そう言うと女が額に触れてきた。驚きと緊張で体が固まる。

「――――」

女がなにか呟くと、体の中から言いようもない力が沸いてくる。

「なっ、なんだ！？」

「澪斗様の魔術を開放させていただきました。イメージしていただければ魔法を放てます」

「はい？魔法？……うおっ！なんか使えたぁ！！何！？何コレ！！恐っ！俺、俺どうしちゃったのォ！？」

俺ホントに大丈夫ぅ！！？

どんどん溢れて来る力をどうしようもなく発散したくなって、女が何か言っているのも聞かず、視界に入った窓を勢いよく開くと体の思うままに力を放った。

――――ドゴオオオオンン…

――――――――

あれから半年とちょっと。よく分からないまま、いつのまにか俺はバージリーニ帝国‘最強の皇帝’となっていた。

それもこれも、この‘上辺だけ天使’の所為だろう。実際は魔女でかなり長く生きているらしい。年増というとものすごい形相で怒られる。

「何澪斗？じろじろ見て」
「なんで皇帝になってんだろうと思って」
「見せかけだけの皇帝だけどね」
「仕切ってんのはラミュだからな」
「だって澪斗に任せてられな……え？…！？」
「どうした？」
「アイツっ…！！」
「ラミュ？」
「ヤバイ澪斗！！こんなことしてる場合じゃない！！ヤツが来る！」
「は、はいっ！？ヤツ？」

「アーディシャイト・グランクルムズ！！広大な土地と戦力を有する大国・グランクルムズの女王にして私と同じ魔女よ！！」
「でえぇえ！！？」
「今、頭の中に直接交信してきた。お忍びで邪魔する、と。澪斗…見抜かれるかもしれない」
「俺の人生終了のお知らせ…？」
「…気を付けてはいたんだけど、まさか一人で来るとは」
「ど、どうしよおおぉぉ！！！」
「アーディは珍しいものが好き…。確実に澪斗を気に入る。というかおもちゃにする。そうなったら皇帝どころじゃない」
「詳しいな」
「昔一緒に居たから」
「ダチか」
「悪友よ」
「悪友かぁ…京も悪友かな」
「京？」
「向こうの俺のダチ。…あっ。なあラミュ」
「何？」
「ラミュって異世界召喚出来るんだよな」
「そうだけど今無駄なことは言わないで。今対策を考えてるの」
「その対策だけどさ。そのアーディシャイト？は珍しいのが好きなんだろ？」
「ええ」
「じゃあさ、京を召喚出来るか？」
「え？」
「いやアイツも結構面白いし、この前世界旅行したいって言ってたし、ちょうどいいかなぁなんて」
「…っ、また交信！？…って早っ！！もう来るの！？」
「なあ京召喚しようぜ。時間もないみたいだし」

「召喚は多分出来るけど、その人をどうするつもり？」
「アーディシャイトに交換条件で差し出す」
「…ダチって言ってなかった？」
「だってアイツ俺の危機になんもしてくれなかったし」
「…まぁいいか。じゃあ召喚しよう。澪斗はその人を強く思い浮かべて。声に出してもいい。一度キリよ。いい？」
「よ、よし任せろ！！」
「ちょっと、こんなところでヘタレでないでね。

じゃあ…思い浮かべて…」

京京京京京京…

「京京京京京京馬鹿京京京京阿保京京京京禿毛京京京間抜京京京…」
「【我が主の願いを叶えよ】」

――――パアアア

「…」
「…」
「…」
「よお」
「…よお」
「なんか昼寝してたら生贄にされる夢を見て、今に至るんだが」
「そりゃ大変だったな。ようこそバージリーニ帝国へ」
「何その棒読み。何その格好。なにココ」
「俺の国」
「は…」

「時間がないので失礼します。ようこそおいでくださいました京様。我が名はラミュクリーゼ。澪斗陛下に仕える者にございます。この度は京様にご協力いただきたくて召喚させていただきました」
「れ、澪斗陛下…」
「はい。具体的に申しますと――」

そこで大きな風が起こる。

――――ゴオオォ

「はっはっは！！久しぶりじゃのラミュ！」
「はあ…」
「あれが…」
「おお、美女」
「してどれだ？おまえが肩入れする冷笑のレイドという若造は」
「冷笑！？おまえどんなキャラで生きてんだ」

京が小声で聞いてくる。

「無表情の最強の皇帝」
「くはっ！」
「しょうがねぇだろ。ヘタレなんだよ！」
「開き直ってんのか」
「ほお…アレか」

「み、見つかったああ」
「ほら、覚悟決めて行ってこいよ」
「ぐっ。……ようこそバージリーニ帝国へ。俺が皇帝澪斗だ」
「ふむ。良い男じゃな…。のうラミュ？」

「そうですね。我等が皇帝ですから」
「あの無表情の面を剥がすとどのように変貌するのかのう…」

ギラり、効果音が付くぐらいに凝視される。や、ヤベェェェ！ラミュぅぅへーるぷぅぅ！！

「アーディ、今日はどのような用件で？」
「ふふん、分かっておるくせに。皮を剥がしにきた。２匹のなぁ。ラミュクリーゼ…主じゃろう？前皇帝を消したのは」

消したあぁ！？んなバカな…

「確かにアレは皇帝に向いていなかった。そこで丁度試したかった召喚を行ったというわけか？」
「…バレました？まぁ消したと言っても記憶を消去して他の地へ送っただけですよ」
「十分非道よなぁ」
「アナタに言われたくありません」
「ふふふ」
「うふふ」

ちょっとちょっと、怖いんですけどお二人さん。

「ところで、顔が引いておるぞ？冷笑の皇帝よ」
「！！」
「表情が変わらぬと聞いたが…案外そうでもないか？変えれぬだけか？」

こ、怖ぇぇぇ！！コイツ怖いよ！

「その内は弱かったりしてなぁ」

ニヤりと笑った顔が魔王に見えました。

「アーディ、我が主の侮辱は許しませんよ」

「ふふ。主のう…。裏の主はどちらかの」

やべっ、限界！！顔がぁ！！！ラミュー！！

「ほお…これが冷笑の皇帝の所以か。確かに威圧感はあるの」

「アーディ。今日のところは帰りませんか？」

「そうよのう…。なにか収穫が欲しいんじゃが…。冷笑の次はどうなるのかのう？」

じっと見つめてくるアーディシャイト。

だ、ダメだあああ！！

「…と、トイレェェ！！！」

「待てぇこんのヘタレがああ！！」

限界が来た俺にツッコんだラミュの横に居るアーディシャイトはキョトンとした表情を作ると、次の瞬間に大笑いしだす。

「愉快っ！！実に愉快じゃ！！あっはっはっは！それが本性か！ヘタレか！」

「あぁもう澪斗のバカ」

「いやでもあのトイレ…」

「どこでも行ってこればいいよもう」

「じゃあ遠慮なくトイレに」
「待てヘタレ。本当に行くヤツがいるか」
「え、ダメなの？」
「当たり前。…アーディ、黙っていて欲しいんだけど」
「ん？できると思うか？」
「思わないけど頼んでる」
「あー…アーディシャイトさん？えと、交換条件とかどうでしょう？」
「ほお、ヘタレの皇帝よ。その条件とは？」
「うっ。…アレいりません？」

指差したのは京。

「え、今まで放置プレイだったくせにそこで俺？ってかこれは生贄の正夢？」
「ふむ。アレも中々良い男じゃの。主もヘタレか？」
「バカ言ってんじゃねぇよ。澪斗と一緒にするな」
「ふふ。わらわは珍しいものを好むのじゃが…」
「京は異世界人だぜ」
「おい本当に俺を売るつもりか」
「当たり前だ。俺はヘタレのためならどんな犠牲も厭わない」
「厭えよ。ていうか意味わかんねぇよソレ」

「ふふふ、よいぞ。気に入った。キョーとやら、わらわの城へ来い」
「キョーじゃねぇよキョウだよ」
「キョー」
「変な鳴き声みたいじゃねぇか」

「ラミュ。良い物をくれたの」
「…澪斗が言い出したことです」

「澪斗覚えてろよ。いつか復讐しに来てやる」
「いいじゃん。京、世界旅行したいって行ってたじゃん」
「世界どころじゃねぇよホント。未知だよ」
「ではゆくぞ京」
「ええ」
「ではまたのラミュ、ヘタレの皇帝」

――――ゴオオォ

「大丈夫かな」
「今更？」
「うん。ホントにヘタレ黙っててくれるかな」
「あ、そっち？友達の方じゃないんだ？」
「京はなんだかんだで生きていく」
「ふぅん」

―・―・―・―・一ヵ月後

【招待状
キョーと結婚するから式に来い。　アーディシャイト・グランクルムズ】

下の端っこのほうに殴り書きみたいな文字があった。それは恐ら

く京の字。

【俺は嫌だあああああ！！！！】

―・―・―・―

ラミュクリーゼによって目覚めたヘタレではなく、実は前から持っていたヘタレ属性は、この先も一生消えそうにない。

皇帝陛下は超ヘタレ（2）（後書き）

なんだか微妙なものになりましたね…？
また書く、かな？

センセとワタシ（前書き）

恋多き高校生活も最後の冬を迎えようとしている。そんな時、人生の革命が起こりました。

――２６歳のセンセと１８歳のワタシの物語。

センセとワタシ

私、快（かい）　璃空（りそら）に、

高三の秋の終わり、人生の革命が起きました―・・・

進学先も決まり、中間テストも終わると気持ちはダラダラ。
でも、一つ上の彼氏とのハッピーライフは続くはず、だった。

「別れたー！？」
「うん」
「なんで？」
「…飽きた？」
「はあ…また？」

「だってもう友達として好きとしか思えないんだもん」
「今回何ヶ月？」
「ん…３ヶ月、かな」
「璃空はいっつも早過ぎるよ！」
「うー…」

原因は薄々気付いている。
でもそれはきっと、言葉にしちゃいけないんだ。

「おいおまえら、サボんな！」

今は体育の時間。
こちらに歩きながら声を上げたのは体育の飛棟（ひとう）先生。

「はーい。でも聞いてよひーちゃん」
「誰がひーちゃんだ」
「璃空また別れたんだよ？」
「あ？今年何回目だ」
「３回目デス」
「はあ…また聞いてやる。今は授業やれ！」
「「はーい」」

ダムダムと響くバスケットボールの音。

自分で言うのもなんだが、運動神経は良いと思う。
顔もブスではないと思うし、勉強もそこそこできる。それと身長は…卒業までに１５５ｃｍに伸びる予定だ。
平均以上の能力は持っているけど、突出した能力はない。そして恋愛が下手らしい。これが自己分析の結果だ。

――キーンコーン・・・

授業の終わりを告げる音が鳴ると、皆一斉にクラスに戻っていく。今からお昼の時間だ。

チラ、とセンセの方を見ると、数人の生徒に囲まれている。

適当に生徒をあしらっている左手の薬指には、リングが存在を主張していた。

―飛棟（ひとう）　晃（こう）。２６歳。身長は１８０弱。彼女がいるという噂あり。でも女子生徒から人気。

メガネはダサいのをわざとチョイスしているらしいが、効果は今の所あまりみられない。

３年の春に６限目の英語を屋上でサボったのをきっかけになんだか仲良くなった。

それから何かあると英語をサボって屋上に行っている。

５限目が終わると、教室を抜け出す。目指すは勿論屋上。

立ち入り禁止のドアをガチャリと開けると、案の定フェンスにもたれているセンセの姿。この時のセンセの姿はいつもより格好良い。メガネを外しているからだ。

「センセ」

「よお、またバカやったのか？」

「違うよ！今回は振ったの！」
「へぇ。で？」
「なんかもう好きって思えなくなったから」
横目で見てくるセンセの視線に耐え切れなくて、外の景色に視線を移しセンセから顔を逸らした。
「続かないなおまえ」
「どーせ子どもだもん」
「まだ言ってねえ」
まだって、言おうとしてるんじゃん！
「まぁ確かに、顔と性格のギャップがあるよな」
「なにそれ」
「もう少し性格も大人びてるかと思った」
「やっぱ子どもって言いたいんじゃん」
そこでセンセの方を向く。
「そうだな」
「いいもん。いつか、とびっっきりのいい人見つけるもん！」
「俺みたいな？」
「そうそう、センセみた―…」
言いかけて止まる。左手に光るリングが、眩しかった。
本当にセンセは理想的だと思う。人気があるのも分かる。
そんな気持ちを隠して…

「あーもうホント、センセがいい！」

そう、心の内を冗談に混ぜて、笑いながらも初めて漏らせば…

「いいぜ」

…予想外の言葉が返ってきました。呆然とする私。

「これからは名前で呼べよ…璃空？」

「っ！！」

急展開についていけません。

「冗談、だよね？」

恐る恐る聞くと…

「俺がそんなクソつまらん冗談を言うと思うか」

「いえすいません」

…鬼の形相が返ってきました。

「でもセンセ、彼女いるんじゃ…」

左手の薬指を見る。

「ああこれか？女除けだ。言い寄ってくる女が少し減る」

少しなんですか。

「ほら、俺の名前呼んでみろよ。知ってんだろ？」

知ってるけど…。

「璃空？」

いつの間にか、私はフェンスとセンセに挟まれるような形になっていた。

こんな至近距離で名前を呼ばれて、顔に熱が集まっていくのが分かる。

私は俯きながら口を開いた。

「こ、晃…」

「聞こえねえ」

「…晃！」

「よく出来ました。顔上げろ。褒美をやる」

褒美という言葉につられて顔を上げると…チュっと可愛いリップ音が響いた。その後抱きしめられる私。

「これが、ご褒美？」

「不満か？欲張りだな」

「違うよ。ご褒美っていったらアメとかじゃん」

「…そうか。おまえは俺のキスよりアメが欲しいのか。…また考えとく」

なんだか若干ショックを受けている様子のセンセ。

だがそんなことよりも、私は現実の処理の方に必死だった。

センセと付き合う？本当に？だってあのセンセだよ？1，2年の頃はただカッコイイ人だとしか思わなかった。
好きになったのはセンセと屋上で会うようになってから。それでもセンセには彼女がいると思ってたから、諦めようと他の男子と付き合っていた。

「さて、俺はもう行く。またな」

そう、センセは長くここに居ない。というより、仕事やらなんやらで居られないんだろう。

「うん、またね」

引き止めたいけど引き止めれない。寂しい気持ちを出さないように笑顔で手を振る。

ドアが閉まるのを見届けると、しゃがみこんでフェンスに体を預ける。

「信じ、らんない…」

嬉しさで、涙が溢れた。

―――――――――

あの日以来、センセとまともにしゃべっていない。二週続けてセンセは屋上に来なかった。
今までも毎週会えたわけじゃないが問題なかった。好きという気持ちは押し留めていたし、付き合っている男の子もいた。
でも今は、センセが好きな気持ちが抑えられない。なのに、メルアドも携番も知らなくて声すら聞けない。あの日が夢だったんじゃないかとさえ思えて来る。

「どう思うー！？」
「夢見てたんじゃない？」
「うわーん！」
「ウソウソ。ごめん、私が悪かった。ん～、単純に忙しいんでしょ？」
「そうかなー。ホントに夢だったんじゃ…」
「ひーちゃんも2年生の担任してるし、今の時期はしょうがないんじゃない？」
「うー…」
「それか放課後会いに行ったら？」
「え」
「え、じゃないわよ。それぐらいしたっていいじゃない。彼女なんでしょ？」
「た、多分」
「よし、行ってこい」
「え、今？」
「放課後って言ったでしょう？」
「はい、すいません」

今日の放課後、会いに行こう。

――――――――

ドキドキと高鳴る胸に手を当てながら階段を降り、センセの居る職員室へと向かうため、角を曲がると…

「ねぇ先生！彼女と別れたって本当！？」

「このごろ指輪してないよね！！」

「先生私と付き合ってよ！」

複数の女生徒に囲まれたセンセが居た。その光景を見て、さっきまでの決意はどこかに飛んでいき、代わりに不安が心を覆う。

私は見てられなくて、来た道を引き返した。

――引き返す瞬間、センセと目が合った気がした。

「うぅっ…」

泣くな。泣いちゃダメだ。でも…止められない。

放課後の屋上。誰もいないそこで、一人しゃがみこみ、顔を隠しながら静かに涙を流す。

あれから何分経ったか分からないが、涙は段々と止まってきた。

「センセ…」

気持ちだけが募る。

会いたい。声が聞きたい。

「――晃…！」

「呼んだか？」

「！？」

頭上から聞こえた声に、バッと顔を上げる。

「センセ！？」

なんで、居るの…。

「…泣いてたのか」

その言葉に、はっとしてまた俯く。

影が動いたと思ったら、いきなり腕を持たれて前に抱き寄せられた。

「悪かった」

抱きしめてくる腕の中で、また涙が溢れてくる。

「ダミーの指輪とメガネを外した日から放課後はいつも苦労してる。抜け出すのに２０分はかかる。

璃空のことを、公表できたらいいんだがな…」

「私、夢だったのかとっ、おもっ、思って…！」

途切れ途切れの私の言葉に、あやす様にポンポンと背中をたたかれる。

「夢じゃない。ただ少し、忙しかった。…ってのは言い訳にならねぇな。本当に悪かった。おまえが他の男に取られなくて良かった」

「もう、センセ以外見れないよ！」

「そうか…。

璃空、センセじゃなくてさっきみたいに名前呼べよ」

そう言われて、心拍数が上がった。

センセの腕が動く気配がしたから、チラとセンセを見ると、目が合ってしまった。

「璃空…」

不思議と目が離せなくなって、自然と口が開いた。

「晃…」

そう言った瞬間センセは嬉しそうに笑った。その顔がカッコ良すぎて、耳まで赤くなったのが分かる。

「璃空、褒美だ」

差し出されたのはアメ。促されるままに口を開けると、ソレが放りこまれた。

「うまいか？」

コクっと頷くと、満足げにセンセは微笑む。…ホントに反則だよセンセ。どれだけ、私の心を持っていけば気が済むんだろう。

そんなセンセに見惚れていると、いきなりセンセの手が伸びてきて私の顎を掴む。

ゆっくりと顔が近づいてきて唇が重なると、センセの舌が私の口内に侵入してくる。

そしてアメを見つけると、味わうように転がす。そうやって一通り堪能すると、またゆっくりと唇が離れていく。

センセは自分の唇をペロリと舐めると、妖艶な笑みを浮かばせて言う。

「褒美だ。完璧だろ？」

その言葉に真っ赤な顔で頷くと、センセの顔がもう一度近づいて

来た。

――センセ、これからも苦難はイッパイだろうけど、センセと居るためなら私がんばれるよ。だから、離さないでね――。

センセとワタシ（後書き）

ファンタジーじゃない？…そういう時もありますって☆

気まぐれ魔王様と記憶喪失のオレ（前書き）

目覚めたらそこは知らぬ土地。オマケに自分が誰だか分からない。記憶喪失の口悪主人公と、主人公を拾った魔王様と、そんな気まぐれな魔王様・アージュシルトに苦労する配下達（主にノザ）の落ち着かない日々のお話。

※ちょっとした遊びのつもりが…。
昔書いていたものに付け足したんですが、予想外に変なものになりました↑

【主人公?・ラーニエ】【魔王・アージュ】【総隊長・ノザ】【一番隊・メレディオン】
【二番隊・ベル】【三番隊・ネイト】【四番隊・フォズ】【五番隊・ウェズ】
無駄に多くなりました。

気まぐれ魔王様と記憶喪失のオレ

「ちょっとアージュ様。気まぐれにモノを拾ってくるのはやめてくださいって言ってるじゃないですか」
「いや、記憶喪失というモノを初めて見たから」
「見たから、じゃないですって。どうするんですかコレ」
「ここに置く」
「何に使うんですか」
「…観賞？」
「疑問系じゃないですか！」

黒髪の男は銀髪の男に抗議する。

「まぁまぁノザ。そんなにカッカしなくてもいいじゃないか。ハゲるよ～」

そこに横槍を入れたのは金髪の男。

「黙れ一番隊」
「せめて名前言おーよ」
「黙れファズティック」
「メレディオンだってば」
「黙れ女垂らし」
「ん～否定はできないねぇ」
「じゃあ置くぞ」
「ダメですってば。しかも『じゃあ』って何処から出てきたんです

か」
「君達の会話が長いからアージュ様が飽きられたんだよ」
「あぁ、すみませんアージュ様。ですがもう一度お考えください」

「ん、考えた。やっぱり置く」
「ホントに考えました？ものの数秒だったんですけど。大体名前も分からぬモノを置くなど・・・」
「名前は分かっている。
…ラーニエだ」
「あきらかに今考えましたよね？」
「違う。なあラーニエ。おまえはラーニエであろう？」

そうです。今まで散々、モノ，扱いされてきた、ラーニエです。

『って知るかあ！人のこと散々モノ扱いしやがって！誰がラーニエだ！』
「まぁ落ち着けラーニエ」
『だから違うっつってんだろ！』
「では真名は？」
『お、覚えてないけど！』
「ではラーニエだ」
『なんか嫌だ！』
「駄々をこねるな。
…ここでは記憶喪失者はラーニエと呼ぶ」
『どんな分かりやすいウソだよ！』
「アージュ様に向かってなんという言葉遣い！」
『そもそも誰だアージュって！』
「…魔王アージュシルト様を知らないのか？」
『だからオレ一応、記憶喪失だって。って、魔王？』
「ノザ。記憶喪失者とは態度がデカいのだな」

「このモノぐらいでしょう」
『ねぇ、だから‘モノ’じゃなくって‘者’にしてくれない？』
「はぁ・・・。アージュ様がそこまでおっしゃるなら仕方ないですね。このモノはこの城に置きましょう」
『ねぇ、オレの話聞いて、た？』

あれ？なんか身体が……

「おいラーニエ？」
『だから、ラーニエ、じゃ、な…』

そこでオレの意識は途切れた。

―――――――――――――――――――――

「本当に置く気なんですね？」
「ああ」
「…分かりました」
「ククク、楽しみだ」

この国、いやこのブラッド大陸を統べる、魔王アージュシルト・ブラットフォール様。
大陸を統一してから暇になったのか、『ちょっと出かける』と言って出て行っては、色々なモノを拾ってくる。

ついに人間まで・・・それも記憶喪失者とは。というか、何故人間がこの地にいる？
本当に人間か？

疑問と悩みはこれからも尽きそうにないが、主のためならば、命すらも捨てるのが従者というもの。（意見は言うけどね）

この先、ストレスでハゲようとも、このノーフォーズウィーヌデーザ・アードレヴェルド。

「貴方様について行きます」

見渡す限り広がる草原。花が風を受け、嬉しそうに揺れている。

いつの間にかオレはあそこに居て、いつまにかフードを被ったアイツは現れて、そしてオレに問いかけた。

「どこから来た」
『…』
「名は」

『…』
「答えろ」
顔は見えなかったが、酷く冷めた声が印象的だった。
『…覚えてない』
「…来るか」
何故か反射的に頷いた。

「――様！」
…ん。誰かが、呼んでる？
「――ニエ様！」
んー…
「ラーニエ様！ラーニエ様！！」
…誰が
『ラーニエだああ！』

「おお。おはようございます」
『えっ、あ、うん？』
「覚えておられませんか？昨日アージュ様とお話しの途中で倒れられたのです」
……ああ。
『思い出した。えっと、』
名前が分からず、そこで止める。
「ノザです」
『そうだ。おはようございます、ノザさん』
すると続々と人が入って来た。
「お、ラーニエ様起きましたぁ？気分はどうです？」
そう言って先頭を歩いてきたのは、長身で金髪の甘いマスクの男。この間延びした話し方を昨日聞いた覚えがある。
『大丈夫です。迷惑をかけました』
「いいんですよ、気にしなくても。さて揃ったことですし、自己紹介を始めましょうか。こちらへ」
大きな一人用のイスが二つと、長椅子が二つ。一人用の高級感溢れるイスにオレとアージュが座った。

昨日とはうって変わって和やかなムードで話は進む。オレも冷静に…

「改めまして、ノザ・アードです。総隊長を務めています」

『総隊長？！』

いやいや冷静に。いやでもだって、若いよ？十代にしか見えｎ「今年で２８になります」

『ウソぉ！』

ダメだダメだ、冷静に。

「良い反応しますねぇ、ラーニエ様。ノザは童顔な上に身長が高くありませんから」

「黙れメレディオン。おまえがデカいんだ」

うん、確かに１７０ｃｍのオレより低いし童顔…って、

『誰がラーニエだ！』

「おや、まだ言ってたんですかぁ？まぁそれは後にして俺はメレディオン・ラムメルです。一番隊隊長をサボりながらやってまーす」

絶対コイツ女泣かせだ。なんかこう…タラシオーラが溢れてる。

「歳は…ヒミツってことで」

女かおまえはっ！

「ミステリアスな方が魅力的でしょう？」

コイツと会話してると…ムズムズする。

「メレディオン、余計なことはいい。そうそうラーニエ様、アージュ様以外は敬語も敬称も必要ありませんよ」

『え、いいの？てかオレもいいんですけど』

「あなた様はアージュ様のものですからそうはいきません」

オーケー。‘もの’ね。ここでは神経図太く（すでに図太い気がするけど）ないと生きていけない！

‘アージュ’にだって敬語も使わないぜ！

「さあ、では次々いきましょう」

「ラーニエ様、二番隊隊長を任されています、ベル・ウィンです」

ラーニエの件はちょっと置いておこう。

「三番隊隊長、ネイト・ダーフです」

爽やかな笑顔ですね。

「四番隊隊長フォズ・アルテノ」

ん？ものすごい棒読みが聞こえたような…。

「俺は認めないからな。おまえがアージュ様の横にいるなんて」

「こらフォズ。申し訳ありませんラーニエ様、難しい年頃なのです。私は五番隊隊長、ウェズ・ナウです」

難しい年頃って…

『フォズ何歳？あと身長は？』

「…」

「フォズ答えなさい」

「１４…１５２」

ふむふむ。１４歳に１５２ｃｍね。

『うん大丈夫さ少年、きっと今から伸びるよ』

「うっせえ！哀れみの目で見るな！！」

『反抗期？』

「ラーニエ様も昨日反抗期だったじゃないですか」

横からベルが口を挟む。

なんだかベルもメレディオンと同じニオイがする…。

『あれはそっちが人のことをモノ扱いするから悪いんだろ』

ちょっとムッとしながら言い返す。

「そうでしたね」

その軽い言い方にまた少し、イラっとくる。

「ラーニエ様もよくイライラしますね。思春期ですかぁ？」

『アホかぁ！二十歳じゃあ！！』

この金髪め！…あっ、思い出した。

「記憶ないからってウソはダメですよー」
『いや今戻ったんだって！歳だけ思い出した』
「歳だけですか」
『うん』
「…刺激を与えればいいんですかねぇ。しかしラーニエ様も童顔とは。せいぜい１８くらいにしか見えませんよ」
『そんなに童顔？変な話だけど、オレまだ自分の顔見てないから分かんないんだけど』
「あぁ記憶喪失ですものねぇ。そうは見えないですけど」
「メレディオン、雑談は後だ。ラーニエ様、こちらに居られるのが我等が主、アージュシルト・ブラットフォール様です」
『ブラット？ブラッド（血）の間違いじゃなくて？』
「…」
『悪かったってアージュ』
「呼び捨てか」
『うん。なんか綺麗過ぎる顔の奴には遠慮はいらないって言うことわざがあったようななかったような』
「…」
『…そこ突っこむとこじゃね？』

ていうか、呼び捨ては構わないのね？

「おまえは今日からラーニエだ」

いきなりか。いきなりラーニエ話か。

『なんでラーニエ？』
「気にするな。我が地のルールで最も守らなければならないのは、俺の真名を忘れぬことだ」
『…真名？』

「アージュシルト・ブラットフォール。この名を覚えておけ」
『アージュシルト・ブラッドフォールね。了解』
「一度死ぬか」
『短気だな。分かってるって、ブラットでしょ？』
「普段は、アージュ・フォールだ」
『略すの？』
「相手に真名を教えることは、忠誠を誓う時、敬意を表する時、信じる証を示す時が主だが、俺だけは別だ。おまえの場合は名字も真名もはないが」
『へぇ～。じゃ、ノザ達も違うってこと？』
「ああ、だが今はまだ早い。正式に決まってないからな」
『？』
「明日には決まる。さて、俺はもう行く」

そう言うと、アージュと一緒にノザも立ち上がり、

「ではラーニエ様、失礼します」

部屋を出て行った。

「俺は約束があるので行きますねぇ」
「では私も」
「メレディオン、ベルほどほどにしろよ」
「はいはいっ、じゃさよならラーニエ様～」
「失礼します」

金色の短髪と黄色の長髪が去っていく。

『…女？』
「はい…。二人は癖が悪いんです」

「…俺ももう行くぜ」
『おう少年。君も遊びかい？』
「誰が少年だ。フォズだバカ」
「こらフォズ」
「だってウェズ、あっちが先だぜ！？」
『兄弟みたい』

ボソっと呟くと

「まぁそのようなものですから」

聞こえたらしいネイトが答えた。

『仔犬と母犬のようにも見えるけど』

青い髪がキャンキャンと揺れる。赤い髪が宥めるようにゆっくりと動く。

「ウェズに一番懐いていますからね」
『フォズみたいな弟欲しいかも』
「フォズは大変ですよ？まだまだ子供です」

そう言ったネイトにフォズの足が飛んでくる。

「聞こえてんだよ！俺は子供じゃねぇ！」

その足を爽やかな笑みを絶やさず、軽々と片手で止めるネイト。

「その言動が子供だと言うのです」
「…」

『ときに少年、友達はいいのか？』
「だから遊びじゃねぇよ！」

そう叫ぶと部屋を出て行った。

「ラーニエ様、あの子に同年代の友達なんていないんですよ。強大な力は時に仇となるものです」
『ふーん…？』
「ふふ、フォズを手懐けるには餌付けが手っ取り早いですよ」
『餌付け？』
「甘い物で一発です」
『へぇ。じゃ今度お茶会をしよう』
「いいですね。都合が合えば俺も参加しましょう」
「では私がフォズを連れていきます」

かくして、フォズ手懐けよう作戦が決行されることとなった。

――――――――

『バカか？それともカバか？ネズミか？リスか？ウシか？「魔王だ」魔王かそうかそうだった負けた』
「…なにが？」
『そんな憐れんだ目で見るなメレディオン。オレはラーニエだ』
「ちょっと落ち着いてラーニエ様。フォズと仲良くなるのが目的でしょう？なんであなたが酔ってるんですか」
『酔ってなんかない。オレはハーニーだ』
「誰ですか。ハニーですか。俺はハニーより優先してここへ来たと

いうのにどこがお茶会ですか」
『オレはチャニーだ』
「原型崩れてきてますよ。酔っ払いの相手は得意じゃないんです。ベッドは別ですけどねぇ。
　というわけで退散します。アージュ様チャニー様さようなら～」
『オレはミニーだ』
「おまえはラーニエだ。いい加減覚えろ」
「いやアージュ様、今ラーニエ様は酔っていらっしゃるんです」
「ノザ、甘やかし過ぎじゃないか？名前も覚えていないとは」
「いやあのアージュ様？話聞いて…って酔ってます？」
「酔っていない。俺はアッジューだ」
「誰ですか。ちょっと発音しにくいんですけど」
「そんなことはない。俺はアッキーだ」
「顔と合ってないんですけど」
『オレはミニーだ』
「俺はミッキーだ」

『「二人合わせて、愉快な仲間達だ」』

「どこがですか。なんで声揃ってるんですか。
　二人合わせても今のあなた達じゃ、迷惑な酔っ払い達、にしかなりませんよ。
　大体二人って少ないでしょう。フォズ水を」
「…ん」
「何で一個？
　…ラーニエ様の分も出してください」
「イヤ」
「…あぁもうウェズ！」
「フォズ？水を出しなさい」

「…」
「甘菓子(クランニュ)をあげますから」
「はい水」
「…さあアージュ様、ラーニエ様飲んでください」
「誰がアージュだ。俺はラッキーだ」
『誰がラーニエだ。オレはポッキーだ』
「じゃあラッキー様、ポッキー様いいから飲んでください！
なんで私がこんな……世話係じゃないんですよ！？
ネイトがいれば…ベルは女だし…ああー！！！」
「そうカリカリするなノザ。カルシウムは足りているか？」
「誰の所為ですか！カルシウムなら毎朝タップリ摂ってますよ！
摂取量が追いつかないくらい日々大変ですけどね！？」
「ふむ。やはり補佐を付けるか？そうしよう」
「補佐ですか？有り難いですけど…ってあれ？アージュ様シラフですか？」
「これぐらいで俺は酔わん。少し遊びにノッてみた」
「…。じゃあラーニエ様も…？」
『Ｚｚｚ』
「こっちはホントの酔っ払いだったんですね」

―――――――――

『イタイ…

アタマが、イタイ…』
「ラーニエ様おはようございます。気分はよろしいようで、なによりです」

どこをどう見たらそう見えるんだ。
なぜかノザの笑顔がムダに眩しい。いや、怪しい光で眩しい。

『昨日の記憶がない…何してたっけ？』
「ミッキーとミニーが仲良さそうでしたよ」
『意味分からん。ノザ頭大丈夫？あ、だからそんなにニコニコなの（黒いけど）』
「ふふ…いたって正常ですよ？昨日は痛かったですけどね？」
『ああそうだ、昨日…』

昼からお茶会をしたんだ。
アージュ、ノザ、メレディオン、フォズ、ウェズ、オレの六人で。
アージュが来たのは意外だった。

それからお菓子を出して……？

ダメだ、アタマがイタイ。

「まぁいいです。今日はこれからアージュ様の所へ行きます」
『はーい…』
「…大丈夫ですか？」
『なんとか』

頭を抑えながらオレは今、アージュの玉座の隣に座っている。

……え？位置おかしくない？ここ王妃とかそういう感じじゃ？

「ではこれより真名の儀を始める」

儀式？

「我が真名はノーフォーズウィーヌデーザ・アードレヴェルド。
これより如何なる時もラーニエ様を守護し、我が命を奉げることを誓います」

「我が真名はファズティックメレディオム・ランザライメル。
これより如何なる時もラーニエ様を守護し、我が命を奉げることを誓います」

「我が真名はベルベスト・ウィンチェス。
これより如何なる時もラーニエ様を守護し、我が命を奉げることを誓います」

「我が真名はジェスティネイト・ダーフェル。
これより如何なる時もラーニエ様を守護し、我が命を奉げることを誓います」

「我が真名はフォーシィクウェイズ・アルテノイス。

これより如何なる時もラーニエ様を守護し、我が命を奉げることを誓います」

「我が真名はウェズブレン・ナークマール。
これより如何なる時もラーニエ様を守護し、我が命を奉げることを誓います」

…はい？

『何…コレ？』

「真名の儀だ」

『だからそれが何かって聞いてんの』

「忠誠を誓う儀式だ。
…ということでおまえは今日からラーニエ・ブラットフォールだ」

『どこらへんが「ということで」なんだろうね』

「細かい事を気にしていたら人生は生きていけないぞ」

『アージュに説かれるとは思わなかった』

「あぁアージュ様。暇なあまりソッチの方向へ進んでしまうんですね」

金髪のタラシ男が笑いを堪えながら、出てもいない涙を拭う。…ソッチってなに？

「私も驚きました。本気ですか？必要なら世界中から女を集めます

が…」

ノザは心底驚いたようにアージュを見る。

「必要ない。

そんなに驚くことか？」

「とりあえずフォズの教育に悪いので退室させていただきます」

ウェズは若干怒り気味だ。

「…まぁ、いいが…そんなにか？」

「はい。では後日詳細を聞かせていただきます。フォズ」

「はーい…？」

二人が出て行くとネイトが口を開く。

「俺は少々反対なんですが…」

「何故？」

「世継ぎを残せないじゃないですか」

「いや問題ないだろう？」

そうアージュが言った瞬間横から、くはっと押さえ切れなかったらしいメレディオンが吹き出した。

「くく…すみません、続けてください？」

「しかしあまり公表は出来ませんよ？」

眉を寄せながら意見したのはベル。

「それは別にいいが。何をそんなに渋る？」

「アージュ様、やはり世間的に男と男が…というのはちょっと…」
「？…何の話だ」
横の金髪の笑いは増すばかり。オレの疑問も増すばかり。だから聞いてみた。
『なぁ、さっきからなんなのさ？真名の儀を済ましたら皆ブラットフォールになるんじゃないの？』
「バカかおまえは」
真顔で言ってきたアージュ。怖い。
「違いますよ…ラーニエ様。妻になるんです、よ。…ふはっ」
なんだかムカツクぜメレディオン。…て、え？
『妻っ！！？』
「だから反対しているんです。男同士を認めていないわけじゃないですがトップが堂々と、というのも…」
その時のオレはノザの言葉なんて耳に入っていなかった。
『妻…』
「ノザ。誰の話をしている？」
「え？そりゃアージュ様の…」
「では何故俺が男を伴侶に持つことになっている？」
「は？だって男のラーニエ様を―」
「なに言ってる。

ラーニエは女だ」

「「「は！！？」」」
「ぶはっ！！もームリ！」

ノザ、ベル、ネイトの三人は見事に固まっている。メレディオンだけが腹を抱えて大爆笑中だ。

「気付いていなかったのか」
「俺はっ、気付いて、ましたよ？くくっ」
『…そっか。女だった』

記憶喪失とは別で忘れていた。というか気にしていなかった。

それから2分ほど経過した頃、メレディオンの笑いも納まり、三人も現実へ戻って来たようだ。

「驚きました…あ、いえすみません」
『いーよ？オレも忘れてたし』
「忘れて？いやその前に、そのオレってやめません？」
『ん～、なんかもう癖なんだよなー』
「ノザ。好きにさせてやれ。女らしさなど求めていない」
「アージュ様が言われるならよろしいですが…」
「それより、ウェズとフォズも勘違いしているのか？」
「まず間違いなく」
「…言っておけ。

今日はこれで解散だ」

―――――――――――

衝撃の事実を知ってから二日後。舞台は城の外。
中級レベルの魔物の大群が城へ向かっていると聞いたので撃退しにそこへ向かった。アージュ様と。

「ノザ」
「はい」
「俺は隊長を6人作ったはずだ」
「そうですねアージュ様」
「こういう事が起こった時に、俺が出なくてもいいように、だ」
「そうですねアージュ様」
「俺が面倒臭くないように、だ」
「そうですねアージュ様」
「それが何故肝心な時にいない」
「メレディオンとベルは女。ネイトは花の世話で忙しいらしく、フォズは新作スイーツを発見した模様。ウェズはフォズの保護者役でついていきました」
「ふむ。
おまえ以外の隊長を総替えするか」
「待ってください。
アイツらはバカですけど実力だけはあるんです」

「多少弱くても実用性が欲しいのだが」
「アイツらも使える時は使えます」

『アージュ〜！！』

そこへ新しい声が混ざる。

「ラーニエ様？何故ここに？」
「俺が呼んだ」
「はい？危険な場ですよ！？」
「だが補佐ならば当然だろう？」
「補佐？」
「補佐」
「…まさか、この前言っていた…」
「そうだ」
「っっ！
はあ〜…」

悩みの種が増えた。

『こいつら倒せばいいんだな！？よっしゃ！任せとけっ』

剣も持っていないようだし武術を得意とするのか？
なにやら意気込んでいるので静観することにした。…が、

『あ〝ー！！剣忘れたー！！！！
へるぷ…ヘルプミー！！』

……。

『…なんて言うと思ったかコンチクチョー！！！』

…おお。見事な跳び蹴り。

しかし…あれが王妃？アージュ様の？何か違うような…。

『剣が無くても男は拳だー！！かかって来いやあ！！』

自分で男って言ってるんだけど。

そこでアージュ様をチラ見すると…

「！！」

口角を少しあげて笑っている。

…ダメだ。人生なにが起こるかわからない。

出会って数日。何に惹かれたのか私には全く理解出来ない。

いやもしかしたらただの気まぐれ…？

しかしアージュ様がいいとおっしゃったならば…ノザはどこまでもお供しましょう。

――――我が真名はノーフォーズウィーヌデーザ・アードレヴェ

ルド。
如何なる時もアージュシルト・ブラットフォール様を守護し、慕う者。
この命、尽きるまで――――。

気まぐれ魔王様と記憶喪失のオレ（後書き）

とりあえずノザが不憫。「ノザのストレス記」のが良かったかもしれない↑

ツンデレ女王様と異世界人（前書き）

トリップ先はとっても気の強いツンツン女王様の下。
毎日罵倒され貶されるも離れられない。何故って？
――そりゃあ……時々見せるデレがたまらないからさ――

ツンデレ・・・いやツンツンデレの女王様と、地球では確かにSだった一般人の物語。

ツンデレ女王様と異世界人

【拝啓　ドラゴン飛び交い、女王様がイラつく季節となりました。今日も上空にはドラゴンが見えます。大きいものから小さいものまで。
さて、俺の近くにはイラつくドラゴ――失礼、女王様がいらっしゃいます。女王様は年に一度情緒不安定の時期に入るそうです。産卵日ですかね。
なんでもいいですが、八つ当たりされる俺は堪ったもんじゃないので早く産卵期が過ぎ去ることを願うのみです。　敬具】

…今日も俺は誰に宛てたわけでもない手紙を、底なしと噂の泉へ落とす。ついでにこの紙は水に濡れても大丈夫らしい。

風見（かざみ）　一句（いっく）。
２２歳。顔にはそこそこ自信あり。
それと♂であって奴隷ではないハズ。
そう俺は確かにＳだったハズだ。
少なくとも、Ｍでも奴隷でもなかったハズだ。
それがなぜ？

「まだかぁ？このウスノロが！」
「はいすいません」
この女には逆らえないんだあああ！！
「何か文句でも？」
「いえなにも」
最初の出会いが悪かったのもある。だが…
「おいそこのハゲぇ！！なにをトロトロしておる！邪魔だ！出て行け！」
どこの工場長だ。とても一国の王とは思えない。しかも女。
「あの女王様？そこまで言わなくても」
「女王ではなくリーズと呼べと言っているだろう！」
「はいすいません」
口出ししたことじゃなくてそっちがダメなのか。
「何か言ったか？」
「いえなにも」
「名を呼んでみよ」
「…リーズ」
「真名を言うてみよ」
「リーズミセル・ミフェラン・フィフィメン」
「よい」
「はい？」
「何でもない。貴様もさっさと働け」

「はいはい」

まぁ働くといってもリーズの近くで書類にサインやら、主にリーズの世話なんだが。

一年前、ベッドから落ちた姿のままリーズの足元にトリップした俺はその場で下僕に任命された。

それから俺の人生は変な方向に突っ走っている。

特別に教えよう。

俺の一日は…

「イック、茶！」

「はいただいま」

「…濃い」

「すいません」

「肩が凝った」

「じゃそこ座ってください」

「もう少し弱く」

「こんな感じですか？」

「弱すぎる。ヘタクソめ」

「すいません」

「小腹が空いた」

「あ、菓子の新作ありますよ」

「…まずまずだな」

「お、良かったです」
「ん？ない。イック、あれを取ってこい」
「…はいどうぞ」
「遅い」
「すいません」
…大体こんな感じだ。
なんだろう…改めて確かめると泣けてくる。
だがなんだかんだで金は溜まってる。だからいつでも城は出ていけるんだけど、どうしても離れられない。
何故かって？それは…

「ふう…。
イック…」
0時。リーズの声が急に甘みを帯びる。ツンからデレへ変わった瞬間だ。
俺とリーズは何故か同じ寝室だ。と言っても毎日ウハウハなわけじゃない。デレがある日は珍しいのだ。
「リーズ、おいで」

素直に寄って来るリーズ。普段言おうものなら鋭い眼光か鋭利な言葉が飛んでくる。

「リーズ今日は酒はどうする？」

「いらない」

「なら何が欲しい？」

「ナニ」

え、そういう答え方？というかもうちょっと恥ずかしがって欲しい。…無理か。デレはあっても照れはないもんな。

いやいや粘れ一句！

「分かんねぇ。ナニが欲しい？」

問う俺に濃厚なキスが飛んでくる。ついでに理性も飛ばしそうになりながら、耐える俺。

「リーズ、言わなきゃ分かんねぇよ」

これが最後のチャンス！デレも粘り過ぎるとツンに戻る。…あぁなんで俺こんな極めてるの。

リーズの綺麗な顔が少し歪む。

ん、今日はムリか…、と諦めかけたその時…！

「…イックが欲しい」

奇跡キタ━（゜∀゜）━！！！！！

もうそれからはノリノリ。天へまっしぐら。

・・・

しかし朝起きると…

「ん～、おはよリーズ」
「遅い。早くしろクズが」
「…すいません」

昨日の甘さなんて欠片も見られないままリーズは部屋を出ていく。

いつものことながら溜息を一つ吐くと、俺も用意をして泉へ向かう。

この手紙が誰かに届いてたら俺も大変だよな～、とか頭の端で思うがやめる気はさらさらない。今日はトリップから記念すべき一年目だった。

【拝啓　あの時から一年経ち、ツンにもデレにも磨きがかかる季節となりました。

今日もツンツンから一日が始まり、あるか分からないデレを期待して終わるのでしょう。俺ってなんて健気なんだ。そう思いません？さて、あっちでは尽くされてばっかりだったので始めは扱いに困りましたが、ツンデレってハマると抜け出せないもんですね。あぁウチのお嬢はツンツンデレですけど。デレて酔った時なんて天国の向こう側まで見えるくらいです。扉なんてずっと開きっぱなしです。　敬具】

なんてふざけた手紙を今日も泉へ落とす。そして日の終わりに、なんとなく泉へ来てみると…紙が一枚浮いている。

【名も無い貴公子様。あなたのお気持ちは痛いほどよく分かります。私の側にも超クールな皇子様がおります。この前私が虫に首を刺されたんです。その痕を見た皇子は私に地獄への扉を開いてくれました。終わりの見えないトンネルを見たようでした。】

「な、なんか返事…返ってきちゃったよ！！！」

俺の命大丈夫か！！？いやこの手紙の主も大丈夫か！？地獄への扉って、おいっ。

紙を両手でがっちり固定して凝視しながら俺の頬の筋肉が引き攣る。

――――俺の寿命はあと数日かもしれない。

ツンデレ女王様と異世界人（後書き）

な、なんか変なシリーズ第2みたいな！？

世界の中心は俺様王様ドS様（前書き）

S、M、N。三つ巴の共演。

――――大国カンラプルク。特に最近勢力の拡大が著しく、諸国の注目度も高い。

だが何より注目を集めているのは、カンラプルク現王、ヴェルゼイド・ドエス＝ア＝クール・カンラプルクだ。

15歳という若さで王となったヴェルゼイドは、衰退しつつあったカンラプルクを3年で再び大国へ押し上げた。

冷めた瞳は何者の追撃も許さない。冷めた瞳が熱を帯びることはない。冷めた瞳の見つめる先は何が写っているのか。

噂が絶えぬ若き王。謎の死を遂げた彼の両親は、彼自身が手にかけたのではないかという噂まで飛び交っている。

誰も持たぬ金色の瞳を、唯一持って生まれたヴェルゼイドは、神の子か、はたまた悪魔の子か――――

「ヴェルゼイド～。これ見て！あのガーラント国のお姫様だよ！！
さっすが傾国の姫と呼ばれるだけあるよね～」

名を呼ばれた男は、しかし書物から視線を移さない。

「ねぇ～ヴェルゼイド～！！」
「アルサス…今はやめておきなさい。また怒られますよ」
「ばっかだなあヒュスラン！！怒らしたら勝ちなんだよ！」
「はい？」
「しゃべらせたらオレの勝ちってこと！！」

ヒュスランと呼ばれた男は額に手を当て、溜息を吐く。

「あのねアルサス。お願いですから、大事な場でそのような発言は
控えてくださいね？」
「大丈夫さ！ヴェルゼイドに迷惑はかけねぇよ！！」

アルサスと呼ばれた少年のような男は、鼻息を荒くして答える。

「アルサス」

そこへ低い低い声が静かに響く。その声に応えてアルサスはバッ
と振り向く。
その顔は嬉しそうで、勢いよく動く犬の尻尾まで見えてきそうだ。

「何ヴェルゼイド！？姫の写真ならここにあるよ！！」
「興味ない。それより出て行け。目障りだ」
「えええ！！？オレなんかしたあ！？」

「その声が鬱陶しい。いや…存在自体が鬱陶しい」
辛辣な言葉を単調な口調で吐く主の視線は、未だ書物から離れない。
「ど、どうしようヒュスラン！？？」
泣きそうな目で縋り付いてくるアルサス。
「…とりあえず部屋から出――」
「どうしようオレ名指しで指名されちゃったよ！！この頃忙しかったから二日ぶりだよ！！！」
「…」
呆れた視線を向けるのも面倒になるヒュスラン。
「ヴェルゼイドぉ！！もっとなんか言って！」
ペラリと長い指でページを捲る黒髪の男。
何も答えないでいると、アルサスはさらにヒートアップしていく。
「ヒュスラン」
「はい」
「アイツの躾はどうなってる」
「順調かと」
「あれでか」
「ヴェルゼイドが絡んだ時だけちょっと変わるんです」
「ちょっと何二人で話しちゃってんの！？仲間外れにすんなよ！！」
「…ヒュスラン。もっと厳しく躾けておけ」
「え！何々！？ヴェルゼイドに躾けされるんならオレ喜んで――」

「少し…黙りましょうか？アルサス」
にっこりと笑ったヒュスランに、アルサスは危険を感じてパッと口を押さえて黙る。
そんな一連のやり取りの中でも、結局、整った容姿を持つ男の視線が書物から離れることはなかった。

こんな光景はこの一室ではよく見かける。
カンラプルク現王、ヴェルゼイド・ドエス＝ア＝クール・カンラプルク。
側近、アルサス・ド＝マゾヒスト。
同じく側近、ヒュスラン・エムアンド＝ニュートラル。
ヴェルゼイドを中心に、この三人がカンラプルク国を動かしていた。
この三人は言動や外見で歳が異なるように見えるが、実は三人とも同じで２０歳だった。所謂幼馴染という仲である。
１６２ｃｍしかなく幼く見えるアルサスも剣を握らせれば、ガラリと纏う雰囲気を変える。
ヴェルゼイドが絡むと少し、いやかなり、いやいや猛烈に面倒臭い性格になるアルサスは、剣の腕ではカンラプルク一だった。
一方ヒュスランはアルサスやヴェルゼイドと比べると剣の腕は落ちるものの、頭が人一倍切れた。

そして中心であるヴェルゼイドは、何でもオールマイティーにこなせる万能型だったが、何より不思議な力があった。
ヴェルゼイドが発する言葉は絶対の力を持っているようで、誰も逆らう事が出来なかった。

「ヒュスラン、連れていけ」
「分かりました。…アルサス」
「いーやーだ！！！」
「アルサス…側近をやめさせてもいいが」
「出て行く！今すぐ出てくからそれはもっとやだあ！！」
「ちょ、アルサスっ。あぁもう…。ではヴェルゼイド、おやすみなさい」

そんなヒュスランの言葉が聞こえているのかいないのか。ヴェルゼイドは何も答えず、またページを捲っただけだった。

それからしばらく本を読んでいたヴェルゼイドだったが、何を思ったか突然本を閉じる。そしてそれを目前の机に置くと、代わりに先程アルサスが騒いでいた写真を手に取る。

「…調教甲斐はありそうだ」

変わらぬ表情でそれだけポツリと洩らすと、写真を落とし扉へ向かう。

扉を開けると…

「何故居る」
「オレの勘ってすげぇ！！なあヒュスラン！？」
「…そうですね」
「何故居る」

少し声を低くしながら再度問う。

「なんかそろそろヴェルゼイドが出てきそうな気がしたんだよ！！」
「…」

答えを聞くと無言で再び歩き始める。そんなヴェルゼイドにアルサスが横に付く。

「なあなあ何処行くんだ！？」
「後宮」
「えええ！？なんでいつもオレじゃないのぉぉ！！？」

その言葉にヴェルゼイドは足を止めてアルサスを見る。１９０近い身長のヴェルゼイドを見上げるアルサス。

「…ヒュスランに相手でも頼め」
「でえええぇ！？」
「ヴェルゼイド…押し付けないでください」
「もういいっ！オレも後宮行く！！おねーさん相手にする！！！」
「は？」
「ヒュスランも行こうぜ！！勝負しよう！？誰が一番ヤ――」
「アルサス。ついてくるなら黙って来い」
「はーい！！！」
「はあ…」

「あ！そういやガーラントの姫見た？」
「ああ」
「どうだった？気に入った！？」
「いや」
「じゃ断っとくよ！？」
「ヒュスランに任せる。使えそうなら貰ってやってもいい」
「検討しておきます」
「よしじゃイこう！勝負だからなぁ！？」

…こうしてカンラプルクの夜は明けていく。

―――――

「本日は６ヶ国協議がございます」
「場所は」
「キジスク帝国です」
「面倒だ。断っておけ」
「ヴェルゼイド…」
「何故俺様が動かなければならない？」
「…分かりました」

「好き嫌いはだめだぞヴェルゼイド！！」
「おまえは黙ってろ」
「うわああっ。ヴェルゼイドが名前呼んでくれないー！」
「アルサス。ちょっと静かにしてください」
「ヒュスランに名前呼ばれても満足しねぇぇ！！」
「…ヴェルゼイド。協議に参加するかバカの相手かどちらが良いです？」
「どちらも断るに決まってるだろう」

――――

「世界の中心？
愚問だな…。
俺様に決まってるだろ」

世界の中心は俺様王様ドS様（後書き）

名前は…ちょっとした遊び心です↑

ワタシとアナタ（前書き）

ノットファンタジー注意。

誰かと誰かの事。出会えてよかった。けど、もう少し、早くあいたかったよ。

ワタシとアナタ

ワタシはどうしたらよかった？アナタはどうして欲しかった？
見せないアナタと踏み込めないワタシ。
近くに居るのに、決して届かない。

もう遅いの？間に合わないの？
心は疑問と不安で溢れているのに、それを見せることはない。
心を見せ合ったようで、一番深い所は隠してる。

でもアナタを責められない。だってワタシも同じだから。
心を見せるのは怖い。だって弱みを握られるということだから。
手放しで求められない。だって‘もし’があった時の代償があまりにも大きい。

アナタを心の底から信じてる。でも、あと一歩が遠いんだ。
踏み出せない。踏み込めない。でも、知りたい。
矛盾する想いはやがて焦燥へ変わる。でも、ワタシとアナタは変わらない。変われない。

ワタシとアナタは近い。アナタとワタシは遠い。
アナタはワタシ。ワタシはアナタ。

『似ている』とよく言われるね。

ねぇワタシはどうしたらいい？
ねぇアナタはどうして欲しいの？

どうしたらアナタの全てが手に入る？

どうしたらアナタの泣く姿が見れる？
どうしたら、ワタシは泣ける？

ワタシもアナタも泣き方を忘れてしまった。
ワタシもアナタも、

「助けて」

その言葉を、忘れてしまった。

一番欲しかった言葉は、一番欲しい時にもらえなかった。
笑顔で隠したワタシ。無表情になってしまったアナタ。

もう少し早くに逢えていたら、二人共違ったかもしれない。
もう少し早くに逢えていたら、アナタはこんなに苦しまなかった。
もう少し早くに逢えていたら、ワタシは泣けたかもしれない。

逃してしまった雫は、どこへ行った？
アナタの本当の笑顔は、いつになったら見れる？

心の中は涙で溢れているのに、それが外へ出ることはない。
心の中は想いで溢れているのに、それをアナタに伝えられない。

アナタはいつでも消えそうで、儚くて、ワタシを惹き付ける。
アナタとワタシは強くて弱い。
ワタシはアナタを助けたい。ワタシはアナタに助けて欲しい？
夜は好き。でも嫌い。

手放しでアナタを求められたら…

あぁ、
心から信じられる勇気をください。

ワタシとアナタ（後書き）

まぁこういう時もあるっていうことで…。

それは決して伝えない想い。

オジサマ王と森の妖精（前書き）

「オジサマ王」シリーズ４弾！
バル視点です。

オジサマ王と森の妖精

一人息子のアッザフォースも王位を継げるくらいにまで成長した。
前から王であることに、楽しみも誇りも感じられなかった。
その所為で執務はサボりがちであった。

幸いここ数十年は平和な時が続いている。
それを良いことに王宮を抜け出し、数日姿をくらますこともしばしばだった。
その度に王宮は大騒ぎになるのだが、アッザフォースなんかは半ば諦めているようで適当に事態を収拾してくれていた。

そんなある時、木々が茂る庭を散歩し木と会話していると、面白い情報が手に入った。

『知ってるか？森の王よ』
「なにがだい？」
『この前仕入れた情報なんだが、半年前森に妖精が現れたそうだ』
「妖精？」
『皆気に入っているみたいだぞ』
「ほぉ…。あの森がねぇ」
『見に行ってみるといい』

「ふむ。面白そうだ」

‘森の王’木々からはそう呼ばれている。

木と会話できるのはアッザフォースも出来ない不思議な能力だった。

情報を手に入れたその日に、王宮を抜け出し愛馬に乗って森へと向かった。

森を少し行くと愛馬から降りる。

「ここで待っていてくれるかい」

首を数回叩くとブルルと返事が返ってきた。

木に触れ、‘妖精’の居場所を聞く。

『あぁ、今は…遊んでいるよ。川で』

「川…」

言われた川が見えてくると、そこにいたのは人間。

見つからないように、木に隠れながら観察する。

後ろ姿だがどうも少女のようだ。

しかし…確かにここら辺は人はいないが、裸とは…。

腰まで届く綺麗な黒髪が、木々の隙間から入る陽気で川の水と共

にキラキラと光る。白い肌は細く折れそうだ。
少女は少しこちら側へ向きを変え、空へゆっくり手を伸ばす。そしてギュっと握ると…
「ふふっ、太陽捕まえたー！！」
聞こえたのはそんな言葉。見えた横顔。
…お嬢さん、捕まえたのは面倒臭いオッサンかもね。

自然と吊り上る口角。
あぁ、確かに‘妖精’だ。

そのまま静かに向きを変え、愛馬の元へ戻り、王宮へ帰る。

「バルケルト王！！」

必死の形相で走ってきたのは側近のラロット。

「今度はどこへ行かれていたのですか！！」
「ん？森へ」
「…ご機嫌ですね」
「分かるかい？」
「なんか嫌な予感が…」

若いが中々優秀だ。

「そうだね…今夜発表するよ」

「なにか企んでいらっしゃるんですか！？はっ！！まさか王位をっ」
「ラロット。少し黙っていようか」
「も、申し訳ありませんっ」

さて、アッザフォースの元へ行こうか。

「アーザー」
「あぁ父上。今日は帰りが早いですね」
「ふふ。報告があるんだ」
「はい？」
「王位をね、譲ろうと思うんだ」
「はぁ…。あのね父上、王宮の人々も国民もあなたを望んでいるんですよ？分かっているでしょう？俺はまだ若い」
「大丈夫君なら出来る」
「…急にどうしたんです？」
「森で少女と暮らそうと思って」
「は？！」
「今日ね、木の情報で森に妖精がいると聞いて見に行って来たんだ」
「…それで？」
「捕まえられた」
「…」
「というわけでボクは森で暮らすよ」
「何が、というわけで？認めませんよ俺は。いや誰に聞いても反対されますよ」
「なんでだい。ボク疲れたし」
「どこらへんに疲れる要素が？結構自由ですよあなた」
「ん～精神的に？」
「…とにかくそんな理由で降りることは許しませんからね」

「えー」
「えー、じゃないですよ。大体その人と結婚すること自体難しいですよ」
「そうなんだよねぇ」
「あっ。…父上、その方との結婚、俺も手伝いますよ」
「なんだい急に？」
「そのかわり、もう少しの間我慢してください」
「王でいろと？」
「そういうことです。どうです、悪くないでしょう？」
「…そうだね。その話に乗ろう。あ、でも明日から一週間は森に通うから」
「あのね…」
「任せたよアーザー」
「はあ…、もう好きにしてください」

そうして堂々と森へ一週間通えることになった。

こんな王族の格好では驚くだろうから、庶民の格好を用意して森へ入る。

「今日はどこにいる？」
『おぉ森の王よ。妖精は川で朝食の調達をしているよ』
「そうか。ありがとう」

…見つけた。
木陰でウトウトしながら釣竿を持っている少女。

迷いこんだ妖精が休憩しているような絵になる光景だった。
静かに近づくと、少女の竿が反応を見せて少女が目を開ける。
驚きに見開く瞳。
「ああ、悪いね。驚かせたかな？」
「お、驚いたなんてもんじゃないです。寿命が半年縮まりました！」
恐らくパニックになっているだろう少女はそれでもボクと会話する。
今日はとりあえず、名前を聞いて帰るかな。
「名前を聞いてもいいかい？ボクはバル」
一応本名は伏せておく。
「・・・芽慧菜（めえな）」
‘メーナ’…いい響きだ。
何処から現れたか知らないけど、そんなことはどうでもいい。
ボクはあまり執着しないんだ…。でもね、その分気に入ったもの

を見つけると、何がなんでも欲しくなるんだ。

メーナ。覚悟してね…、ボクは逃がさないよ。

人違いです。俺じゃないです。マジで。（前書き）

ノリの1作。

人違いです。俺じゃないです。マジで。

俺と同じ名前の大魔道士がいる。
同じ‘名前’であって‘俺’じゃない。
そんなことは誰でも分かる？これが分かられないから困ってるんだ！

おっと自己紹介が遅れた。

【ザキラウォーカァ・アップ＝ジ・ラック】

これが俺の名前だ。

ん？どれが名前かって？
そりゃ、ザキラウォーカァだろ。

ん？長い？
んなこと知ってる。文句は親父に言ってくれ。俺も言いたい。

ん？発音しにくい？
声に出して言ってみ。案外そうでもないって。

ん？友達はいるかって？

いるよ！！！…一応。

「おいザキラ。おまえまた間違われたんだって？」
「そーだよ！聞いてくれよジル！！俺もうヤだよ！！！」
「落ち着けもちつけ。で？」
「あれは、雪の降る寒い夜だった…」
「ここ数年雪見てないんだけどな」

―――――――――――

俺は１８歳３年生。青春真っ盛り。
同じ名前のアイツは一つ年上で、既にこの学校を卒業していた。

…にもかかわらず。

「おうおうザキラウォーカァってのはおまえかァ！？」
「違います。いやそうなんですけど、違うんですマジで」
「あァ！！？何言ってんだオメェ！！ふざけてんのか！？」
「だからアナタ達の探してる，ザキラウォーカァ，さんと俺は違うんです」

ホントに。だから俺を解放して。マジ怖い。

ただいま目の前には、ガラの悪い男が3人。特に春にこういうことが起こりやすい。

何故かって？

そりゃザキラウォーカァさん（以下ウォーカァ。俺はザキラ）と俺が別人物ってことを知らない、中学卒業したばかりのピチピチの奴らが調子こいてウォーカァさん（恐ろしくて呼び捨てに出来ない俺）に喧嘩売りに来るからだよ。

で、大抵…

「嘘付いてンじゃねェぞゴラァ！！」

ってなるんだよな。

で、俺は…

「いやホントに。本気と書いてマジと読むくらいに」

って言うんだけど信じてもらえない。

「デタラメ言ってんじゃねェよ！！じゃあその傷はどう説明するンだ！！？この前ヤンチャした時のもんだろう！？」

ヤンチャって…おまえらが言うとカワイく聞こえるな。

で、傷ってのは、顔の？

あぁ、派手に目の所に斜めにズバーって入ってるからね。でもね、これ…アレだから。

「飼い猫に引っ掻かれました」

「ンなわけあるかァ！！！」

いや、マジなんですけど。よく見て。そのうち治るような傷でしょ？

タマサブロー（略してタマ）やってくれたぜ全く。

ってか、コイツ等より俺のが年上なんだけどね？なんで敬語って……怖いからだよそこの君。

「へっ。喧嘩っ早いって聞いたが単なるヘタレじゃねェか！！さっさとやっちまおうぜ！！」

ええええ。ちょ、もう、これだから近頃の若いのは！？

「オラァ！！！」

ものすごい声と共に飛んできた拳。それが当たる直前に、俺は姿を消した。

――――――――

「ったくさぁ。毎度毎度絡まれる所為で逃走のスキルだけ身に付いて、他の魔法サッパリっていう状態になっちゃったじゃん！！」

「しょうがないな」

「毎回毎回俺は違う人ですって言ってんのになんで皆信じないんだ！！」

「うーん」

「俺ってそんなに信用出来ない顔してる！？」

「…そうだな。顔がどうしても…」

そう。俺がウォーカァさんと違うと信じてもらえない理由の一番は顔だ。

なんというか…言っちゃぁなんだが、ウォーカァさんは、その、能力と性格はすごいけど顔は、その、アレなんだ。な？

反対に俺は能力は平凡なんだけど、顔は良いんだ。自分でいうのもアレだけど。で、俺は‘調子に乗っている’顔に見えるらしい。

でも実際はもちろん調子になんて乗ってなくて、性格は喧嘩なんて好まないしどっちかっていうとへ、ヘチャレなんだ。

…要は真逆なわけで、ウォーカァさんはその事を周りに言われて、俺の顔にひどく恨みを持ったらしい。

それからウォーカァさんは顔を隠しちゃったもんだから余計に‘ザキラウォーカァ’の正体が謎になって俺に絡むヤツが増えて…

って俺悪くなくね？俺被害者じゃね？俺可哀想じゃね？ホントに。マジで。本当（マジ）で。

しかもウォーカァさん、卒業して偉い職に就いたってのにまだ俺の顔の事根に持ってるみたいで、

同じ名前の別人がいるとも言ってくんねぇし、むしろ時々この学校に遊びに来て俺を狙わせようとしてるみたいだし……何度も言うけど、俺悪くないよ！！

「大体さぁ！みんな同じ名前って言うけど、ウォーカァさんは【ザキラウォーカァ・アップ・ジラック】で、俺は【ザキラウォーカァ・アップ＝ジ・ラック】だからね！！ちょっと違うから！！！」

「気付かねぇよ。誰も」

「俺の寿命毎日１０日は縮まってるよ！？」

「そりゃ大変だな」
「あーもう改名してぇ！！」
「すれば？」
「二十歳からだし！それに親父が許してくれねぇ。
『あの‘ザキラウォーカァ’さんと同じ名前だぞ？名付けた自分を褒めたいぐらい光栄じゃないか。』とか言ってくる」
「ははっ、あのおじさんが言いそうなことだ」
「笑い事じゃ――」
「ジル君！」

――ねぇ。と続けようとすると高音が響く。…ジルの彼女だ。

「あ、ごめん今ダメだった？」
「いやいいぜ。じゃあなザキラ。がんばれよー」

くっ。友達より彼女か！！俺も欲しいわ！ジルなんかハゲればいいのに！！
高校入ってからは変な噂が流れるもんだから、女が寄って来なかった。中学ならモテてたのになー。…ヤメよ。過去の栄光だ。

今日も一人トボトボと家へ帰る。

……やっぱりシャキシャキと帰った方が良かったかもしれない。

「おぅおぅ兄ちゃん。ちょっと聞きてぇんだが――」
「違います」
「まだ何も言っねェよ」
「分かります。そして違います」
「すげぇな。流石ザキラウォーカァだ。未来も読めるってか！」

しまった。変な解釈をされてしまった。

「えーっと、アナタの求めてるザキラウォーカァさんとは違うんで他当たってください」

「まぁまぁそう硬ェこと言うなや。今日はヤリに来たんじゃねェんだ。条約をな…」

な　ん　の　だ　。

「人違いです。俺じゃないです。俺アップ＝ジ・ラックです」

「何言ってんだぁ？！こんなに下手に出てやってンのにいい気になってンじゃねェぞ！！」

ほらぁ。こういう人はすぐ怒り出しちゃうんだよもう。

「マジで勘弁してくださいよ。俺違うんですって！」

「犯人は大抵そう言うんだよっ！」

何の話だよ！！

しかし逃げるに逃げれない。俺の逃走能力は発動条件がある。死の危険を感じた時だ。

つっても俺の感じ方次第だが、大体殴られそうな時に発動する。だからそれまでは逃げれない。

能力が発動した瞬間のあの安心感と嬉しさ。

なんでそんな所に毎回嬉しさを感じなきゃいけないんだと思いつつも、感じずにはいられない。

俺はこれからも名前と戦って生きるんだろう。
だが、これだけは言わせてくれ。

俺は、ザキラウォーカァ・アップ＝ジ・ラック　だあああああ！！

人違いです。俺じゃないです。マジで。（後書き）

なんか書いちゃった…。あ、ザキラの誕生日は４月４日ぐらいで。

ありがとうございました！

毒舌少女と15年前の勇者（前書き）

突然の思いつき。

毒舌少女と15年前の勇者

「いやー今日も快晴だね」

なぁんて呟いても返答は誰からも無い。けど俺には二つ声が聞こえてくる。

一つは俺の相棒である剣から。もう一つは……

「……」

ちょっと前に知り合った少女の視線から。

‘うざい黙ってて’って聞こえるね。ばっちり。

「なあ名前、なんてーの？」

「……」

名前も教えてくれない女の子は、なぜか俺の後を無言でついてくる。

別に俺に着いて来ても何も良い事ないのになぁ。

特に何をするというわけでもなく街をブラブラ歩く。

ベンチを見つけたら座ってキレーなお姉さんを密かに眺めたり、気立ての良いおばちゃんから果物買ってオマケ貰ったり。

日々をそれなり楽しく過ごしていた俺は、さっき変わった少女に

出会った。

いや出会ったというより……いつのまにか後ろにいた。結構気配には敏感なんだけどなー。

「きゃー！　盗賊よ！　誰か、誰か助けてぇ！！」

「おーおー、またかよ」

進行方向から聞こえた悲鳴に、俺の足はその場でUターン。

面倒事は関わらないのが吉だ。他人をタダで助けるなんて慈善活動やってられねぇ。そう思って来た道を戻り出した……ハズだった。

「手、離せ」

「イヤ」

何故か少女が服を掴んで阻止してくる。

「盗賊来ちまうだろ」

「なんで助けないの？」

「なんでっておまえ、あんなん助けてたらキリねぇよ。この街は特に多いんだ。大体一般人が飛び込んでってもしょうがないだろ？」

「違う。あなたは同じニオイ」

オイオイ。盗賊の前にこの子の方が危険だ。俺はそう判断すると愛剣を取り出し少女に突き付ける。

「これ以上俺に関わるな」

「あなたの力は何のためにあるの？」

「……俺を守るためだ。もうついてくるな」

愛剣を仕舞い、少女の横を通り過ぎる。すると幼女が騒ぎの方へ走って行く足音が聞こえた。

「知ーらねっ」

頭の後ろで手を組んでのんびり歩きながら、今夜は何食べるかねぇなんて呑気な事を考えていたら、気配が４つ迫って来る。
やっぱりのんびりじゃなくて、キピキピ歩いてた方が良かったかもしれない。

「まさか……」
「パパぁ！　助けて！」

誰がパパだ！　あんにゃろー。
振り向くと先程の少女と、三人の盗賊と思われる輩。少女はそのまま俺にタックルをかましてきた。

「おまえなぁ……」
「ぐっへへ……。ぱぱぁ？　金持ってんだろぉなぁ？」
「持ってねーよ。だからコイツで許して」

俺は少女を前に差し出す。

「お嬢ちゃんこっちへおいでぇ。おじちゃんと楽しい所へ行こう」
「キモイ。クサイ。ムリ」

その言葉を聞いた俺と盗賊三人は同時に顔が引き攣った。
コイツ煽ってどうする。

「パパがんばって」
「あのなぁ、俺は目立ちたくねーの」
「もう十分目立ってる」
「おまえのせいでな」

だが少女の言う通りすでに注目の的で、遠巻きに野次馬が集まってヤレヤレムード。

あーあー、この街とも今日でおさらばか。

「力を貸せラジャ」

愛剣を引き抜く。その刀身は水を纏っていた。

「海のゴミと化せ」

その一言で盗賊三人の体は一瞬にして干乾びた。なんだ？　今日は力が一段と強かった気がする……。

「やっぱり同じ……」
「おまえ、何なんだ？」
「……」
「んじゃ名前は？　手伝ってやったんだ。それくらい言えよ」
「……ソナ」
「ふーん。じゃあなソナ」

聞いといてなんだが、これ以上関わるつもりもない。どう考えても普通の少女じゃない。あ、魔女か？　だったら納得だ。

「ソナも一緒に行くパパ」
「パパじゃねぇよ」

「名前」
「あー、皇雅（こうが）」
「ねぇパパ。一緒に行っちゃダメ？」
「おまえ名前聞いた意味あったか？」

二人で言い合いをしながら野次馬の中を通り抜ける。

「何歳だ？」
「７」
「俺犯罪者みたいじゃん……」
「パパは？」
「皇雅だ」
「コーガは？」
「３１」
「オッサン」
「うっせぇ」

人間生きてりゃ年取るんだよ！　まだまだ見た目は２０代前半だと思ってるけど。
はぁー。この少女どうするかなー。どうも厄介事を持って来そうで怖いんだよなー。

「おい、いつまで着いて来るつもりだ？」
「ずっと」
怖ぇよ。
「あなたが……」
「ん？」

「あなたが世界を救うまで」
「……何言ってんだ？　この世界は平和じゃねぇか」
「違う。深海に渦巻く悪意を、あなたは知ってる。やっと見つけた。海の王」

おいおいおい。もんのすごく面倒臭い子と知り合っちゃったんじゃねぇのコレ？
絶対魔女だよこの少女。あーあ、どうせお近づきになるんなら歳が近い美女が良かったなー。
自称7歳と知り合ってもなぁ。

「あ、おばちゃんタイ焼き二つ」
「あいよー。お嬢ちゃん良かったねぇ」
「……」

なんか答えろよ！

「悪いね、人見知りなんだ」
「いいよいいよ。毎度あり！」

ここの世界には日本の食べ物が多くある。それは15年前に俺が望んだため。

「おー美味そう。ほら食え」
「……ありがと」

礼言えたのか。
少女はカプリとかぶりつく。

「よし食ったな。交渉成立だ。だからこれ以上着いて来るな！」
「何それ卑怯」
「なんとでも言え」
大人は卑怯なんだ！
「まだ飲み込んでないから吐き出せば交渉不成立」
「おまっ、汚い事すんな！」
「なんとでも言えば」
こいつ中々手強い。
「あ、俺便所行くから」
「ここで待ってる」
「おう」
一生そこで待ってろ。
確か……お、やっぱり。
ここのトイレの窓は広いんだ。ガタガタと音を鳴らしながら外へ脱出を図る。
「……兄ちゃん何してんだ？」
「気にしないでくれ。今流行りなんだ」
「そうか」
用を足していたオッサンに不審な目で見られたが気にしない。
怪しい少女から離れるためにはしょうがない。
「……うっし。成功」

無事任務完了。服に付いた埃を払うと街を歩きだす。勿論少女が待っている所とは真逆に。
これで街を抜ければもう会うことはないだろう。そう思い鼻歌を歌いながらルンルンと歩く。

この数分後、再び顔が引き攣るとは知らずに……。

毒舌少女と15年前の勇者（後書き）

あれ、なんか連載な雰囲気？　いやいや……。

裏道ファンタジー（前書き）

周囲は王道、私は裏道！？　ファンタジー

裏道ファンタジー

え？　王子様？　もう婚約されて日々バラ色らしいです。
え？　私ですか？　メルネイラ・ジュカインです。ただ今、宮殿のだだっ広い庭の端っこを掃除中です。

少女が夢見る王道ファンタジーとやらは、異世界からやって来たらしいシーナ様がごっそり持っていかれました。
まぁお二人が幸せそうで何よりです。

「ちょっとメル！　まだ終わってないの！？」
「あ、ごめん。先帰ってていいよ」
「いやよ、周りから薄情だと思われそうだもの」

なんて言って、作業の遅い私を毎回手伝ってくれるのはリネイ。
私は親友と思っている。

「全くもう、なんで遅いかなぁ」
「すいません」

ブツブツ文句を言いながらも彼女は助けてくれる。
気の強いリネイだけど、実は寂しがり屋だと私は知ってる。ついでに……

「あっ、ルイル様！！！」

王子の護衛であるルイル様に恋をしていることも知っている。
私は、この前厨房に入った新入君のがいいなぁ。なんてことを言ったらリネイに殺されそうだ。
それとただ今私にルイル様の姿は確認出来ない。
誰か判断出来ない黒い集団が動いているのは分かるが、その中にルイル様がいることも、そもそもあの集団が人間であるかも不明だ。
そんな中でルイル様を発見出来るリネイを尊敬する。私の視力は悪くないと思うが、恋する乙女は能力が違うらしい。

「あ〜もうっ、今日もカッコイイ！！」

更にカッコ良さまで見分けがつくらしい。ううむ、恐ろしい。
私は話したことがないけど、リネイはルイル様と話したことがあるらしい。そして一瞬で恋に落ちたらしい。
いやぁ分からない。
王子もルイル様も綺麗な顔をされているが、どうも腹黒そうで好きになれない。なんてことを言ったらリネイに殺されそうだ。

「もう一度お話出来ないかなあ……」

難しいんじゃないかな。私達みたいな下っ端があんな格の高い方とお会いすることが珍しいし、私は話したくない。
平和が一番だし面倒臭そうだ。なんてことを言ったらリネイに殺されるだろうか。

「あー、行っちゃった。さ、メル終わった？」
「あ、まだ」
「もう〜」

リネイと一緒に見てたしね。見えなかったけど。
結局それから一時間後に今日の仕事を終えると、二人で部屋に戻る。
さあ、これからは聞き役の時間だ。
「……っでね！　もうその時のルイル様が……」
ルイル様を見かけた日はリネイの興奮がすごくて、話した時のことを聞かされる。
もう何度聞いたことだろう。
「ちょっと聞いてるメル！？」
「聞いてる聞いてる」
うん、平和が一番だ。

だがある休みの日、突然私の平和の一部は崩れた。
「ごめんメル」
いきなりリネイは謝って来た。だがどこか喜びを隠し切れていない。

「あのねっ、あたし……あたしっ、ルイル様の侍女になったの！！」
「へ……」
何がどうなってどう転んだらそうなるのか分からないが、彼女は念願のルイル様の侍女になれたらしい。
……いやいや全然意味が分からない。
「でね、今から部屋を移るの！　メルと会えなくなるのは残念だけど、あたし忘れないから！！　じゃあね！！！」
「え……あ……ぅ……」
驚きのあまり上手く言葉を発せない私を放ったらかして、リネイはどんどん作業を進めていく。
えっと……リネイが、ルイル様の、侍女？……今日から？……え？
「えええ！？」
ものすごく遅れて私がまともな反応を返した頃には、リネイは部屋を出て行く時だった。
「じゃあねメル。元気でね。たまーに会いに来るから！」
「あ……うん。リネイも、元気で……」
なんとも気の抜けた別れの言葉だった。そんな私を気にせず、リネイは満面の笑みで部屋を出て行った。
「……」

あれ……。なんか悲しい。いや寂しい？
なんだろうこの感じ。そう……

「心に穴が空いたみたい……」

風が体を貫通していくような感覚。
平和が一番。だがどうも、彼女も私の平和に入っていたらしい。

トボトボと歩いていつも掃除を施している庭へ出る。
そこへやって来た少年。

「あ、新入君だ」

名前は知らない。けどその青年を見たら、少し、空いた穴が塞いだ気がした。
しゃべってみよう。なんて普段は思わないことだが、空いた穴を埋めたくてしゃべりかけた。

「あの……こんにちは」
「ん？　あ、どうもこんにちは」

気さくな青年だった。名前はナシュというらしい。
私のことも知っていたらしく、毎日お互い大変だね、と予想外に盛り上がった。
そしてどうやら、私はこの青年を好きになったみたいだ。

「ねぇナシュ」
「うん？」
「私ナシュのこと好きみたい」

生まれて初めて告白というものをした。
「あ、そう？　でももう彼女いるんだ」
そして生まれて初めて失恋した。
「だからさ、４番目でいい？」
生まれて初めて告白した相手はプレイボーイだった。
……なんだか急に空いた穴が広がった。
４番目なんてもちろん嫌なので丁寧にお断りした。
「あー、疲れた……」
部屋に帰って、一人呟く。
今日は休みだったのに。なんでこんなに疲れたんだろう。
「はあ……」
明日からリネイはいない。そして近々、新しい子とまた相部屋になるだろう。
心に穴なんか空けている場合じゃない。私にやる気が出なくても、日々は待ってはくれない。
苦労して手に入れた仕事をなくすわけにはいかない。
「よしっ、明日からまたがんばろう……！」
何事も切り替えが大切。
周りがどうなろうが、知ったこっちゃない！

私は私の道を行く！！

裏道ファンタジー（後書き）

ちょっと内容薄いですね……。
でももっと練れば広げれそう。ってことでこの『裏道ファンタジー』か、前に書いた『毒舌少女と15年前の勇者』を連載したいと思います。
まだ考え中なんですが……↑
どっちにしようか……

伝説の剣の行方

我はすごい。
どれくらいすごいかと言うと、そーだな……世界を手に出来るくらいか。

我は世間から重宝されている。
どれくらい重宝されてるかと言うと、そーだな……ついこの前までは厳重な箱に入れられ、警備員が何人もいて、我を守ってるくらいだった。

我は今自由を感じている。
どれくらい感じてるかって言うと、そーだな……クソデカイ山を一振りで割れるほどの力があるのに、そこらへんの薪を切っているくらいに。

あれ、これなんか、考えずれてる？
長いこと誰とも接触しなかったからな、仕方ない。

そうさ、この男が、我をどんな風に使おうとも仕方ないんだ。
『って、んなわけあるかあああああー！！！　自由なんて感じるか！
伝説の剣と呼ばれる我をコイツなんだと思ってんだ！？　薪割り

なんて初めてしたわぁ！　んなもんそこらへんの弱小武器にやらせろ！　よりにもよって‘最強’と呼ばれる我を使うな！！　何故だ！？何故神はコイツに我を託した！！？　理解出来ん！　神の思考は我以上に切れ過ぎてる！』

「ねぇおばあちゃん、この剣なんかしゃべってない？」
「そうかい？　ばあちゃんには聞こえんねぇ」
「あ、そう。じゃいいや」
『よくないわ～！　大体おまえ人助けするタイプじゃないだろ！！
この3日間でよ～く分かった！　どうせ金か体目当てだろ！　いや体はないか。おばあちゃんだし。
いやいやそんなことはどうでもいい！！　とりあえず切るのをやめろ！！』
「しかしまぁよく割れる斧だねぇ」
『剣だよ　ばあちゃん！！　剣だから！！！』
「だろ？　俺もそこそこ気に入ってるんだ」
『おまっ、そこそこ！？　我を使っておいて、そこそこだと！！？
コイツふざけてる！』
「ところでおばあちゃん、この斧買わない？　すごく楽で便利だよ。今なら安くしとくし」
『それが目的かあああああ！！！！　しかも売った後もう一度盗みに来るんだろ！？　最悪だコイツ！　慈悲の心はなっ……ゲフゲフ』

つ、詰まった！！　叫び過ぎた。ノドが痛い。どこらへんがノドか知らないが。

「欲しいけどねぇ、今金が無くてねぇ。悪いね、手伝ってもらったのに」
「いやいいよ。じゃあね」

「また来ておくれ」
「はいはーい」

ばあちゃんナイスだ！　買わなくて正解だ。いくらで売るつもりだったか分からんが、この男はいつまでこんな事をやるつもりだ。

「ちぇっ、ムリだったか。‘あら、孫に見えて来た。可愛くてしょうがない。ついでに武器も買っちゃおう作戦’だったのになぁ。失敗かァ。誰か原因を教えてくれ」

どんな作戦名だ。原因はおまえの腹黒さじゃないか？

「苦労して盗んだんだけどなァ。あ、ほつれて糸が出てる。切っとこ」

『ちょっと待てええええぇぇぇ！！！　我を使うな！　糸切りばさみか！！』

大体我は大剣だぞ！？　何故コイツはこうも簡単に扱える！？
これまでの輩も我を扱うまで数ヶ月はかかっていたはず……。
こんな盗人が選ばれし者？　……やはり信じられん。

名前：キャルディ・ガントナー
年齢：２０歳前半
職業：盗人ｏｒにーと
性格：胡散臭い、面倒臭がり、とりあえず最悪
趣味：よく分からない
身長：我のが少し小さい
容姿：我のが艶やか
武器：我

うむ。これが数日間の分析結果だ。何度考えても我の主には相応しくない。
あぁ……シディアス・マレイジン・ホウリヴァルと言えば、世界三大宝剣。現在、マレイジンとホウリヴァルは勇気ある者の手にそれぞれ渡った聞いたが、一番の破壊力を誇る、我・シディアスは……さっきまで薪割り。
か、悲し過ぎる……。

まず我の声が聞こえていないとはどーいうことだ。いや鞘から出せたんだから聞こえるはずなんだが、もし無視しているとしたらコイツやはり中々の性格だ。
いやいや、力を悪用されないだけマシと考えるか。我の真名も知らぬだろう。違う意味で悪用されているが。

真名さえ分からなければ力も発揮出来ん。世界を巻き込むことはないはず。運悪く巻き込まれるとしたら、旅先で出会う人々か。

「さァて、今日はここらで野宿かなー」

主は（主と認めたくないが）そう言うと、近くの川で服を洗う。
さきほど貰った薪で火をつけると、しっかりとした木と木の間に我を置いて、その上に洗った服をかけた。
って

『ふざけんなオマエーー！！！！』

何度も言うが、我は‘伝説の剣’なんだ。何故物干し竿に使われなければならない！？

「ったく、うるさいヤツだな、さっきから」

主は我を見て呟く。

……え？

『やっぱり聞こえてたんかい！！！！』

コイツ鬼畜だ！

「ちょっと静かにしてよ。俺もう寝るから」

『え、ちょ、待って！』

せっかく会話出来たんだから！！

なんか感動する所が違う気するけど、ホントにひさーしぶりに人と会話したんだよ！

『だからもうちょっとしゃべっ――』

「‘シディシオン・アヴィエンス’【黙れ】」

真名知ってたあああ！！

くっそー、しゃべれねぇぇぇぇ。真名での命令は絶対。

ってか真名知ってんのかよ！　やばいよ！　危険だよ！　世界の終わりだよ！

なんて心の中で叫んでも誰にも届かないこの声。

結局しゃべれぬまま朝を迎えた。

鞘に入れられた我は出されぬまま、杖代わりに使われている今日

この頃。
あぁ、泣けてきた。
辛い境遇の時って、昔を思い出すよな。
過去の主達は大事に大事に扱ってくれていたのに……。
あぁ、涙出てきた。

今までマレイジンが、少年・少女ばかりを主に選び、世間から伝説のショタ剣やらロリ剣と呼ばれていようとも、
ホウリヴァルが、美人で胸の大きい女性を選び、世間から　伝説のムッツリ剣やらアホ剣と呼ばれていようとも、
唯一正統派と言われていた我なのに。
なのに！！　コイツが我を使って悪行を働いたら、我の名も廃るだろう。

『あああ……』

我の努力が……。

「ん？」
『え？』

主は短く呟くと素早く木に隠れた。
どうも盗賊が前方にいたらしい。人数は5人。被害にあっているのは老夫婦か。

「ふーん」

ふーん、じゃなくて！

『主っ！　我の力を使って助けるんだ！！』
「ありゃ殺す気だな」
じゃあもっと焦れーー！！！
『主！！』
「……あと少しか」
何が！！？　殺されるまで！？
「よし今だ」
『よぉっしゃあああああ！！』
鞘から出された我はヤル気満々。
主、見直したぞ！
「おいゲス共」
盗賊達の前に出た主は、我を突き出しながら声を低くする。
ゲス共と言われた盗賊達は一斉にこちらを向いて罵声を浴びせてくる。
「黙れ。それは俺の獲物だ。退け」
『違うだろ！？　獲物じゃないだろ！！？』
煮を切らした盗賊の一人が向かってくる。
「‘シディシオン・アヴィエンス’【放て】」
その一言で我の刀身は輝き、斬撃が放たれる。

――――ドゴオオオオォォンン……

斬撃は近くの木々に当たり、新しい道が出来ていた。

「俺殺すのはキライなんだ……。今なら逃がしてあげる」

我の威力を見た盗賊達は慌てふためきながら去って行く。

『主！　やれば出来るではないか！！』

「さて……」

我の声は一切無視で老夫婦を見る主。

「ありがとうございます！！　本当に――」

「礼は形で貰う。俺は命は取らない。その代わりソレよこせ」

『主ィィィ！！』

せっかく良い事したのに結局！？

老夫婦は震えながら金になりそうな時計を渡す。

「これだけで良しとしよう。じゃーね」

『主！』

本当に何故コイツが主なんだ！？

今までの心優しかった歴代の主とは全然違う。我の相手もしてくれないし。

しばらく歩いて森を抜けた主は街へと入った。
「さてと、換金所は……あそこか」
さきほどの品を持って行くのかと思ったら主の足は違う方向へ。
『主？　行かないのか？』
なんて質問しても答えは返ってこず。もーヤダ。
「お。あったあった」
主の視線の先には……
『え？』
呪いの装飾品でもあるのか？　まさか我を勘違いして！？
『違うぞ主！　我は正常だ！！』
「何言ってんの。うるさいな」
「いらっしゃい！」
「これ。呪い解ける？」
そう言って出した品はさっきの時計。
「おお。これは……中々複雑ですね。ですが大丈夫ですよ。ただし一日かかりますが……」

「ああ、いいよ。じゃあ明日来るから頼むね」

「あー腹減った」

店から出ると主は食事に向かうようだった。

『主……』

まさか呪いがかかっていたことを知っていて、時計を奪ったのか？

『主っ！　見直したぞ！！』

「何がだよ。もうちょっと静かに出来ない？」

『知っていたのだな！？　時計に呪いがかかっていたことを！　それであのままでは老夫婦が呪われるから奪ったフリをしたのだな！？』

「……違うよ。ありゃ金になるんだ」

少し頬を染めた主がなんだかものすごく可愛く見えた。

それからご機嫌になった我は、その夜カジノで不正行為を命じられても鼻歌を歌いながら応じた。

伝説の三つの剣。

一番の破壊力を誇る、シディシオン・アヴィエンス。

実は世間からは、伝説のカタブツ剣やらタンジュン剣やら呼ばれていることは、シディアスは知らない。

伝説の剣の行方（後書き）

書いてる私は楽しかったんです。↑
剣視点で何か書きたいなと思ったら、こんな感じのが出来てました。
これ連載でも書けるかもしれｎ（（

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1370p/

ファンタジー短編集

2011年8月21日14時48分発行